



牛



始



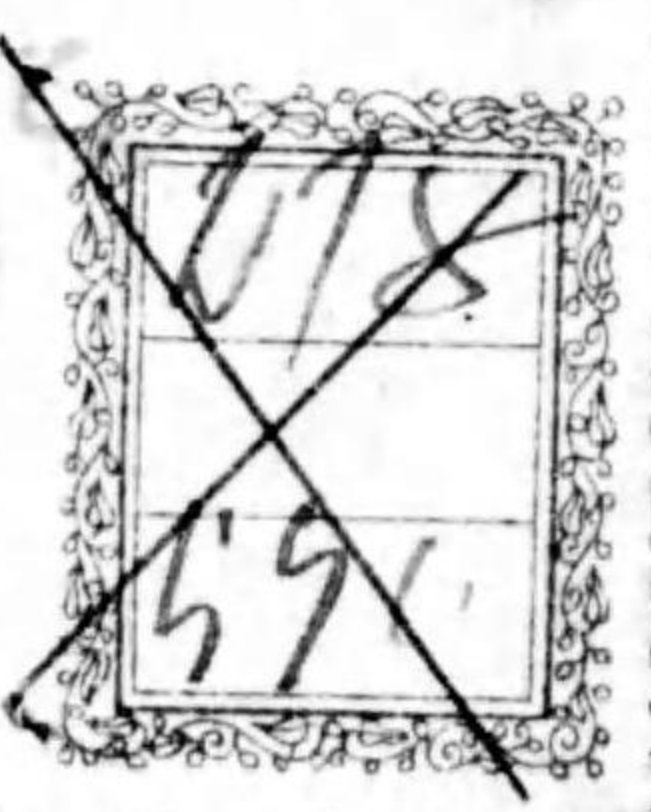
大巻劇

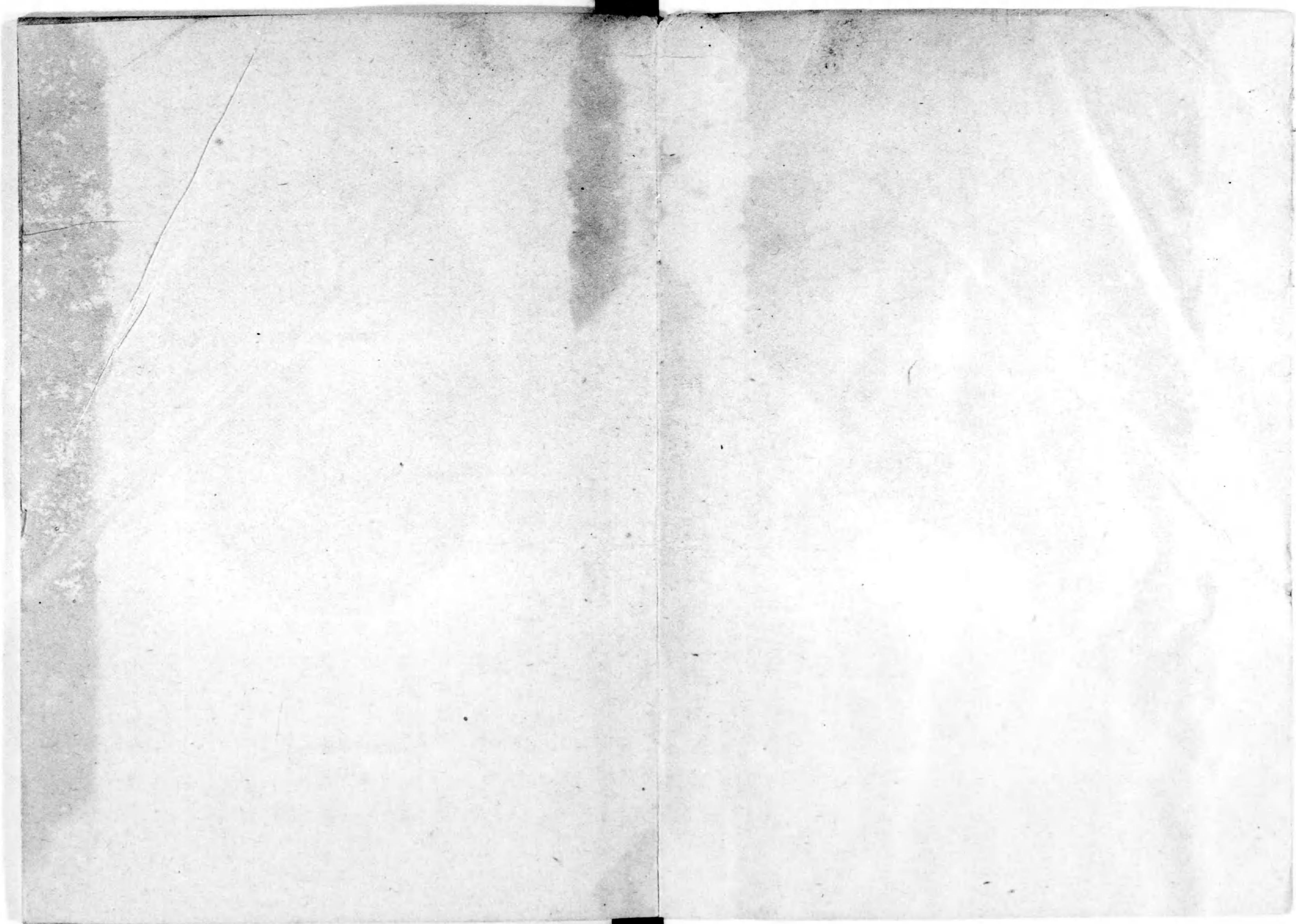
須磨の沈没



古泉堂印

森田三郎





特 101
437

日 活 士 松 濤



劇に脚色された。血涙の悲劇故家庭の好讀物として喝采は

徳富先生著「不如歸」はよく社會を諷刺した。名作で日本における

眞の新小説さ。私

は感動され

た。此度君が著述

される

「須磨の

下關西地

常に家庭

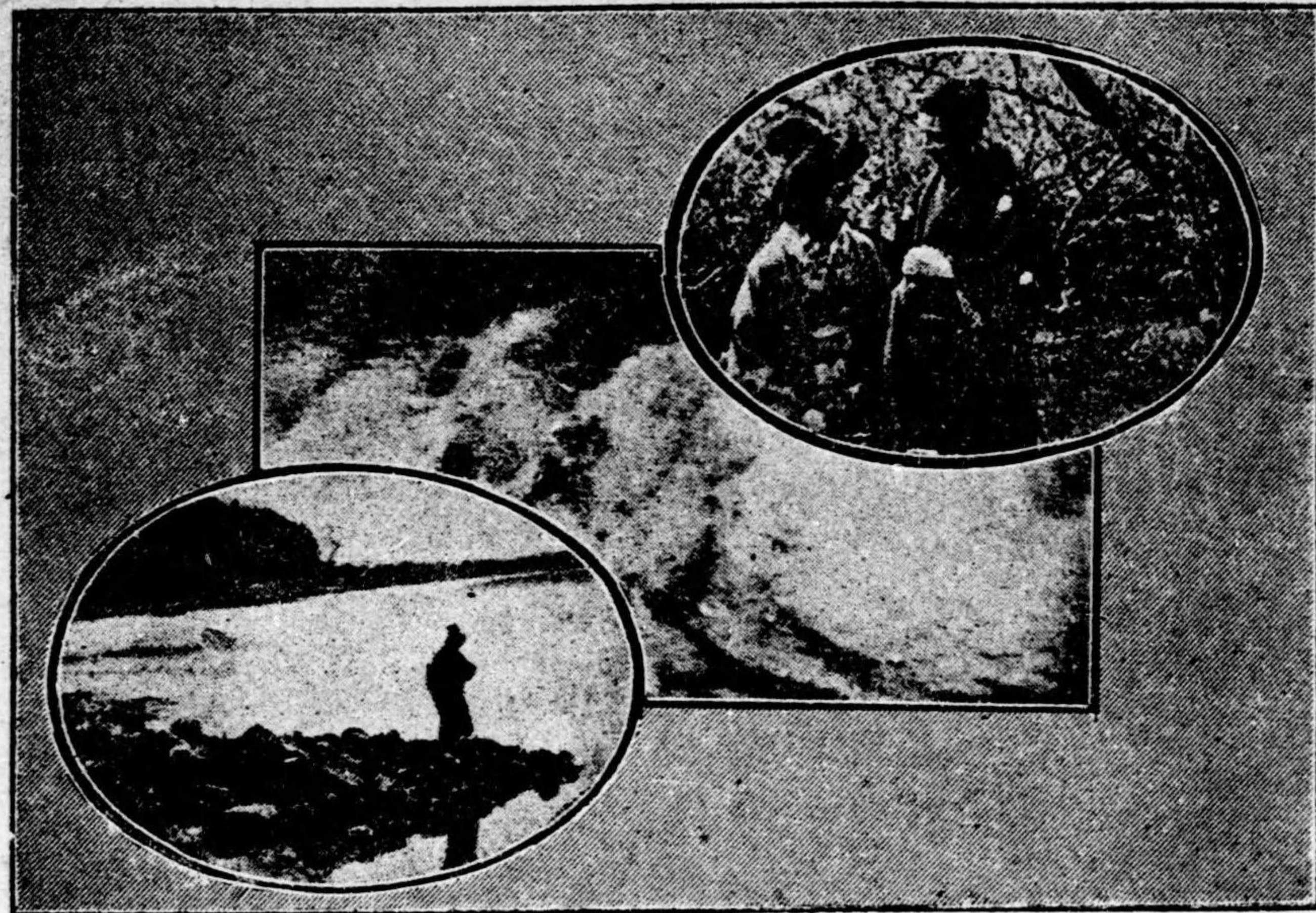
されました或

新事實の活動に

請合

大正 20 年 5 月 内交

須磨の藻くす



このこ
細り残された沙干狩り……

新
婚
當
時



實
家
の
歸
り



悲劇歌
須磨の仇浪

女子大學
寮歌の節

活動之俱樂部社編輯部にて

竹柴如泉作歌

(録音歌)

(一) 波のさしやき

私語が如き、小鼓の音をば、

訪へば響きも微になりて、

寄せしは男波よ返すは女波ぞ、

奇しき運命永久に語りて、

(二) 戀に囚はる

思ひ出の松も舞子の濱邊で、
霞みしめたる沖の彼方の、
眞帆を眺めて綾子を呪ひぬ、
淡路島影神秘のもれて、

(三) 姑の妬心

後生を祈りし姑は數珠をば、
鞭に替て嫁よば打ちね。
尙飽足らでか、肩腰蹴りつけ、
妊娠憎むで突いて倒しぬ、

(四) 無情の良人

夫に絶れば笑ふも冷たく、
睨み目に愛は消てか、
産れし嬰兒を我子で無いぞと、
汚れ無き身を里へ戻しぬ、

(五) 大阪さして

暗夜航く汽船に乗しは綾子よ、
語る人無き甲板上に、
悉歎の涙をホロ／＼落して、
儚なき身をば悶へて泣きぬ。

七	六	五	四	三	二	一
姑 <small>しうごめ</small>	良 <small>りやう</small>	良 <small>りやう</small>	縁 <small>えん</small>	縁 <small>えん</small>	見 <small>み</small>	見 <small>み</small>
	人 <small>ひと</small>	人 <small>ひと</small>	談 <small>だん</small>	談 <small>だん</small>	合 <small>あひ</small>	合 <small>あひ</small>
其一	其二	其一	其二	其一	其二	其一
ふワツ痛 <small>いたい</small> ツ	耻 <small>はぢ</small> る夫 <small>うら</small> 婦 <small>よ</small>	仲 <small>なか</small> の良 <small>よ</small> い	噂 <small>うはさ</small> さの持 <small>も</small> 参 <small>さん</small> 金 <small>きん</small>	止 <small>や</small> めて貰 <small>もら</small> ひ度 <small>た</small> い	半 <small>なか</small> ば妬 <small>ねた</small> に	結 <small>けつ</small> 婚 <small>こん</small> 後 <small>ご</small> の想 <small>さう</small> 像 <small>ざう</small>
.....
四三	三五	二九	二三	一四	七	一

「目次」

大悲剧 須磨の仇浪

(六) 甲板上の苦胸

笑顔に寝入し、我子を抱いて、

頼る父亡し母は病床、

誰人として怨まん我身の罪ぞよ、

されど子故に迷ふ苦しさ、

(七) 噫々……藻くづよ。

此夜の千鳥は悲依露と鳴き去る、

逆巻浪へ水音高く、

皆さん去ばと飛び入る母子の、

怨みは深し須磨の仇浪、

悲劇歌須磨の仇浪 (終)

八	姑 <small>しうご</small>	其二	不安 <small>ふあん</small> の涙 <small>なみだ</small> ……………	五〇
九	春 <small>はる</small> の宵 <small>よひ</small>	其一	額 <small>りたひ</small> へ烟草 <small>たばこ</small> を……………	六〇
一〇	春 <small>はる</small> の宵 <small>よひ</small>	其二	貧乏 <small>びんぼ</small> くちを……………	七〇
一一	里 <small>さと</small> へ	其一	瘦 <small>や</small> せ細 <small>ほそ</small> つた父 <small>ちち</small> ……………	七三
一二	里 <small>さと</small> へ	其二	良人 <small>らうじん</small> が胸 <small>むね</small> の思 <small>おも</small> ひ……………	八二
一三	出産 <small>しゅつさん</small> から	其一	袖 <small>そで</small> 噛 <small>か</small> みしめて……………	九一
一四	出産 <small>しゅつさん</small> から	其二	腰 <small>こし</small> の邊 <small>あた</small> りを蹴 <small>けり</small> 付……………	一〇二
一五	秋 <small>あき</small> の家 <small>いえ</small>	其一	瘦 <small>や</small> せたくつて……………	一〇九
一六	秋 <small>あき</small> の家 <small>いえ</small>	其二	息 <small>いき</small> が頬 <small>ほ</small> にかゝる……………	一一七
一七	落 <small>おち</small> 葉 <small>は</small>	其一	耻 <small>は</small> かゝせた……………	一二六

一八	落 <small>おち</small> 葉 <small>は</small>	其二	何日 <small>いっぴつ</small> に無 <small>な</small> く莞爾 <small>わんじやう</small> ……………	一三四
一九	子 <small>こ</small> の行衛 <small>ぎやうゑ</small>	其一	死 <small>し</small> の恐 <small>おそ</small> 怖 <small>おそ</small> より……………	一四二
二〇	綾子 <small>あやこ</small> の行衛 <small>ぎやうゑ</small>	其二	唯 <small>ただ</small> だ千鳥 <small>ちどり</small> の悲 <small>かな</small> し……………	一五二

御注意……………

裏面を……………

大劇 須磨の仇浪目次 (終)

大悲劇 須磨の仇浪

森野如泉著

見合 其一 (結婚後の想像)

春雨度毎に、山も麓も若葉の色づく薫りを、ふうはりと薄絹で、包むだやうな淡路島を、長閑に眺める濱の舞子へ、沙々ツと軽く潮を散らさせながら、投網を投擲して引き絞るかのやうに、緩く退く波の、島霞む中へ、遠く小鼓の音を残してゆく。

彼の荊しい松の葉も微風に、柔かく匂ひを含んで、霞みの中を

色彩する春の舞子の松林は、濱遊びに集ふ人を喜ばせる。

「もう来そうなもの……。」

休憩所と書いた。公園の茶屋の縁臺から離れて。小さい丸鬚に結た、黒縮緬の紋付羽織に、絹織の重着をして、一と昔前に流行たらしい繻珍の丸帯をしめ、こゝろもち小頸をかして、公園の出端れを眺める五十歳位の女があつた。

「……何して居るのかしら……。」

ぼつらりと、春雨の名残の露となつた。一と霽くが、休憩所の軒をかすめる松の枝から、佇立む砂へ深く印すのであつた。

「あゝ来たゝ、あゝ、未だ娘だわね。」

嬉し氣に、ひとり微笑ながら、小手を擧て招く、

「お母様……。」

臥龍形する松の根に、蹴足蒐つて、軽く身をかはした。十七八歳位の女學生風のが、息を断るやうに駆け寄つて、

「あゝ辛度た。」

と云ひながら、はずむ息の胸を抱へるやうにして、母の傍らの縁臺に、腰を懸るのであつた。

「お母様、餘程待つて……。」

同じやうに腰を下ろして、嬉しさうに眺める母は、娘の一言くが、耐らない愛の押へ兼て、鎚るやうに寄り添ながら、

『否、那樣に待ちやしませんか、よう来ておくれだつたね。もう學校卒業も直だど、父様怎麼に待つていらつしやる事でしょう。』

『あら、お母様厭な、妾もう學校卒業のですわ。』

『お、爾であつたかね。』

目と鼻の、霞む淡路から、大阪の女學校へ入學て、女教師の家へ假寓させて貰い、其監督を安心と、兄一人妹一人の兄妹さりつさや無い可愛さも、末に兄妹が爲めと諦めて、手放した親の心は、年毎に二度の休暇を樂しみに待つて居た。

今年女學校を卒業と聞いた處へ、山一つ越へた豪農水上家から、父亡き子息の縁郎へ、嫁にどの相談を受け、舞子の濱公園を見合の

場所として、娘の綾子を大阪から呼んだのであつた。

綾子の家は、代々續いた財産家で、兄の靜雄が大阪の商業學校を卒業と、代つて、直ぐ大阪の女學校へ入學したのであつた。今日見合いと聞いて見たが、怒怖的恥かしいの念に襲はれて、女教師の假寓を出るさへ心細い心がした。併し、一度は人の妻たらねば成らぬ身の、且つ、母が後見と聞いた或る強い意味と、好氣心とを以つて、監督の女教師からの注意もあり、爾して、大阪から舞子の停車場へ來る汽車中、見合ひに空想する男よりは、結婚後の想像のみ走るのであつた。

汽車を降りて、松林の砂を踏む足が、妙に重かつたが、母の姿を

見るより。總てを忘れて、馳せ絶るのであつた。牡丹色の濃い縮緬の紋付羽織を氣にしなから、櫻花に渦きを繡た縞袴の襟を直して、お召の重衣へ締た華美な色の厚板帯を軽く上から押へて、

「お母様、御用つて、何の御用……。」

「其の御用つてねまア、お父様からのお手紙を讀んだらうね、實は其の見合で呼びだのだが……。」

「でもお母様、妾……。」

母を仰いだ頬を紅に散らして、さし俯向きながら、膝の上へ歐文の綴りを書き重ねる。

「あゝ、お出た。これ直乎となさい、彼方からお出でた右の方ね、

お前の婿さんに成る縁郎さんよ、能く御目にかゝつてねい……。ひよ、と眺めた綾子は、ハツとして顔を眞紅に染め、再び、重く俯首のであつた。

見合 其二 (半ばしつこに)

濱近く出た、松の枝をこいづつて、休憩所で待つ母親に近づいた。大島の着衣の上へ着た黒七子の紋付に、青味がゝつた外套を抱へて面長の蒼白い顔色した。眼の睜る度毎に、大きく愛嬌を含んで、鼻の高い、口元の締つた。二十三四の男を連れた。道行のやうな紫布の黒縮緬を着て、糸織の重衣に、年齢の六十歳位には餘りに華美な

襦袢の襟を出して、歩く度毎に蹴散らす裾から、雪駄にからまるやうにして、紅を色彩つた長襦袢の蹴裾が表はれて、富豪の後家と云ふ気分がたゞよつて居る。

若い男の母親で、子息の縁郎が爲めに、後見と云ふ理由で、見ぬ嫁を定めに、仲人の角志摩を力に、場所の舞子へ霞む淡路から来たのであつた。

「おや、之れは野田様の奥さん、たいそうお待ちしました、此方が其のヘッヘッ、水上の御隠居様でしてね、御子息の縁郎さんが此方……。」

紹介せる仲人の角志摩は、繁藏と云つて、淡路銀行の頭取なので

ある。短い羽二重の黒紋附が、着衣と年齢の五十五歳と云ふ柄に、ふさはしい姿である。銀行の頭取としては、餘りに職務の對表に反して居るが、水上家より資金を仰ぐ、島の銀行家としては、相應な柄なのである。

「あゝ、爾うで御座いますか。」

と縁臺から立ち上がった。綾子の母は、田舎氣質の丁寧に挨拶をする。

「あゝ、貴女が野田の奥様で……。」

と同じやうに、挨拶はするが何處か卑しむらしい、そして其威を無理に作るらしく、冷やかな笑を表して、母と娘どを見交し、

『舞子は、何つも好い場所ですね、良いお天気様で……。』
ソウと横を向いて、子息の緑郎が、嫁に擬た綾子へ對する。其注
意を凝乎と、白眼勝に眺める。

『眞實に、好う御座いますね、さア縁臺へお懸け下さい。』
と席を譲つて、綾子を眺めた母の眼には、温かい野心の無い色
を溢へて、小さな誇を顔に表して居る。

『有りがたう……。さア緑郎や、貴方も懸けたさい、角志摩さん、濟
ません、茶湯を云ふて下さいな。』

茫然として居た。仲人の角志摩は、慌たやうに羽織の襟を正して
懸けかけた腰を上げ、覗くやうに奥を隙見して茶を命令け、腰の煙

草入れを探りながら、何か云はふとした先きを、隠居の後家に折ら
れて、てれくさい顔を遊めて居る。

『お美しいお嬢さんですね、お幾歳ですか、女學校は何年御卒業な
さいますか。』

氣高い、綾子の誇らぬ美を、羨やみながら半ば妬む眼に、態どら
しく斯ふ聞く、言葉なく紅く成つたまゝ、母にびたりと寄り添つて
來る綾子の可愛らしいと思ふ母の心は、抱き締めて遣り度いばかり
の、綾子に代つて、

『ハア、今年十八で御座ますが、未だ少女でして、學校も遂ひ先達
卒業したのですが、能う口も聞けませんので困りますホ、ホ。』

「お、そりや、無理も有りませんよ、妾の緑郎も、大阪の中學へ遣つて置きましたら、教師が氣に入らんと云つて、東京の中學校を卒業まして直ぐ大學へと思ひましたが、亡父が病氣で戻つて貰ひましてからは、何處へも出しませんで、銀行へ勤て置ますが、能う勉強しますので、大きに妾も安心して居ります。」

「お、そりや結構で、お立派な好い子息さんで……。」
 緑郎を見る綾子の母を眺めた。緑郎の母は、云い知れぬ誇りであつた。一寸襟を掻き合せる時、仲人の角志摩へ眼顔で何やら語り。「お、たいそう長話しました、角志摩さん、さア遅ならない中……。」
 「へッ、爾うですか、では野田の奥さん、何れ……。」

「おや、お戻りですか、では妾からも何れ……。」

娘の綾子を顧みて、松林に見え隠れする。水上の母子を見送りながら、仲人のそくさする姿の見え無く成るまで、佇立ひで居た。

「お母様、歸りませう。教師が戻りに是非お連なさいと、云はれましたから、遅く成ら無い中去ませう。」

會つた時に、凝乎と見たつさり。別るまで振り仰がなかつた綾子はあつけ無い見合の現在を浮べて、母を急たて、休憩所を出たのであつた。

綾子と其母との出てゆく二人影が、踏切近い松林に隠れると、偶然現はれた女教師風の大島の路行を着た。三十歳前後の女が、厭な

淋しい思ひにうたれながら、母娘の後を追やうに、休憩所の前を斜めに路切つて、砂に足をとられながら、舞子の停車場へ急ぐ、
 暫時は、霞みのとれた淡島路も、夕日を受けた紫きの淡い靄みの中に浮て、千鳥が波に飛んで鳴く。

縁

其一

(止めて貰いたい)

煤煙の大阪に、五ヶ年間女學校生活で送つた綾子は、人の妻たるべく港から、故郷の淡路へ卒業てふ無事の肩書を土産の飾りに、潮風と浪の祝合ふ囁きの音に送迎されて、母ともく我家へ戻つたのは、昨日のやうに思はれても、もう十日経つて居る。

裏庭の柿の木に、咲きかけた花と蕾をつけて、今年の豊成熟を思はしめる。其前の室から縁側傳へに目的なく空を仰ぎながら、何やらの希望に輝く面持して、父の室へ呼ばれてゆく、
 羽二重と、メリンス腹合せ帯して、銘仙の同じ黒つばい矢がすりの袷衣に羽織を着た綾子を見る父親の善兵衛は、不憫氣に綾子の座るのを待て、何か言はふとして煙草を喫み、
 『あゝ、綾子だつたか、お前お嫁さんにゆく氣かね。』
 『ホ、ホ、お父様、何の御用かしらと思ふたら、那樣な事、妾知りませんわ、お母様に聞いて下さいませな。』
 と軽く答へながら、頬を紅く染て袂を折り返したり、曇むたりし

て居る。

「ハッハッ、爾だつたか、併しな、綾子、縁と云ふものは不思議で、何處に有るや知れんけど、此度の縁談ばかりはな、此父が餘り進まんので、怎麼じや、止めて貰い度いのだが……。」

「えッ、彼の縁談を……。」

颯と顔色を變て、父を仰ぐ綾子の眼に、何時か涙を宿して、必持ち體を慄はせ、怨めしそふに父を見あげる。

「うむ、どうやら思ひ込んで居るやうだが、此の縁談は、家の爲めばかりで無く、お前の末が考へられるのでな、それに誰人やら知れん人か無名の手紙をよこしたので、まア讀んで御覽、それや

之れや考へると、是非止めて欲しいので……。」

『……………。』

袂を噛むで、思はずホロリと涙の一零落として、膝の上へ置れた無名の手紙を讀むともなく見れば、……………。

……………結婚てふ、いとも目出度きさいさきに、斯様な無禮は申し上げ兼ねど、綾子殿が將來の爲め、餘りにふさはしからぬ御縁談と存じ御見合せなさる方宜しきかと、取り敢へず一筆申上げ候、必ず思ひ當る事有之候可く、切にお止め申上候かしこ……………無名の友より……………と書かれて在る。

見馴た字と、ふうつと胸に浮んだのは、監督されて居た。彼の優

しい吾妻妙子師が筆跡に似て居る。見合の日に、心もと無いどて、態々様子を見にお出でた事も有るし、且つ、それとなく水上家を諷された事もある……と思へば、今の自分に取つては、怨めしく其筆の跡が見られる。

「なう綾子、此父が頼みぢや、止めてくれんか、お前は賢い娘ぢやないか。」

「……………」

膝の手紙を、投げ出すやうに、傍へ置いた綾子は、俄然と身を伏せて、ワツと娘心の苦に泣き嗚咽のであつた。其の背を撫でる。優しい父が情の手に絶つて、再び、涙の聲に嗚咽のである。

衣づれが、隣りの室襖で止まると、音も無く開いて、悲そうに父と顔見合した母は、泣きくづれる……。綾子を抱へるやうに、身を引き寄せ、

「これ、綾子や、何で泣くのです……。他人が見聞きでもしたら、笑ふじやないか、ホ、ホ、お父様も母様もな、お前の爲めに、もツと立派な、優しい良いお婿さんを……。お前も女學校を卒業した賢い娘じやないか、さア確りしておくれね。」

「否へ、お母様……………」

母の膝にくひ居るやうに、身を煩悶て泣きじやくる。綾子の其體を抱へて耳へ口をつけやうに。

「綾子、お前學校で、教師から不孝しろつて教はつたかへ、お父様を困らしてさ、お前の爲めを思へばこそ、否、娘の可愛いのは誰れでもで、悪ど知りつゝ他家へ嫁れませんかね、よう聞き分けて……。」

見合も済して、結納まで取り交したのに、急に破談をする父が心は、何と云ふ曲り方をしたのであらう。怨めしい、結納金に就いて水上家で兎や角と云ふたが、そりや他人の中傷で、彼の人に限つて妻を厭つちや居ない、愛があればこそ見合が無事に済だのだ。そして結納まで交したのも、兩家の親が承知なればこそだ、父が急に此の仕打ちには……恨まずには居られ無いと、綾子は口にそれと云はね

ど、心の切なさを涙で訴へるのであつた。

春の半ばを色彩する。彼の舞子の濱で、見合してから綾子の胸には、不思議な印象を残す程、波たゝせる戀を知つたのであつた。

結納交したと聞いてから、取り結ぶ縁の日を、一日も早かれと、祈らぬ日とて無い、それが父からの破談の話、もう居ても立つても居られない、押へる母の手を振り拂つて、自分の室と定められた、裏庭に面した南向きの室へ駆け込むやうにして入り。机の前へワツと泣き伏し、破れた初戀の悲の苦の心をもがいて、胸を掻きむしりながら、煩悶嗚咽のであつた。

微と吹く風に、音もなく赤みがかつた櫻の實が、梢から枝の間を

抜て、葉を傳つて萌しげつてゆく春を語る芝生の上へ落ち、我世の
來たかど蘇生つたやうな、蟻の群を騒ぎらせるのであつた。

縁談 其二 (噂の持参金)

若葉の、緑濃く成りかけた森を抜て、村端れの寺院から、曉の鐘
が韻を永く空に残して去く朝、野田家の門を入つた二臺の車が在つ
た。

土産物らしいのを、乗り捨てた車夫に持たせて、玄關に訪ふて來意
を告げたのは、見合を舞子で行つた時、其仲人を勤めた角志磨繁藏
に、水上家の番頭樋口幸藏の二人で、案内につれて奥深い、南向き

の座敷へ通されるのであつた。

枝面白い老松を眺めて、廻り縁の離れ座敷風に出來た。十疊敷の
座敷へ通されて、時候の挨拶から、話頭一變して、野田家より水上
家へ對する。破縁の書狀に就き、一膝乗り出すやうにした角志磨は
禿かゝつた頭を撫でて、哀れみを請やうな様子をしながら、

角「實に、突然の事で、驚きましたか、何か誤解でも御生じに成つた
のかと、へい、今一度御考へを願度く、番頭の樋口と参りました
理由で……。」

樋「へい、折角の良縁と存じまして、實は手前方一同は、いや早や喜
び居りましたので御座したが、御縁組御断りの御手紙で、へい〜

驚きましたでな、何とか願ひ致し度いと存じまして。」

頭を疊へすりつけて、兩手を柔みく野田の主人善兵衛に、懇願するのであつた。凝乎默言たまし、煙草を喫みながら聞いて居た善兵衛は、冷やかな笑を二人に浴せて、

「否、御心配を種々願ひましてな、怎麼お詫び申してやら、出来ませんので……、まア其縁談だけは、平にお断り申しますで、悪く思はんで置いておくんざい。」

期待して居た言葉だが、使者の役目として、其儘へイでは戻られず。其言葉の消ぬ中をもどかしそうにとつて。

「へッ、爾で御座せうが、唯だ御手紙では、似合ぬ縁談云々で御断

はりで御座したが、何のく似合ぬ處か、手前方にとつては、此上も無い御良縁でな、もうく喜んでますのでな、へッへッ、其處を是非……。」

「否、お断りしませう。そりやもう私如き處の娘が、御大家の水上げへ貰はれて嫁のは、結構で御座いますが、釣り合ぬ縁は、何とかと申しますからな。」

「で御座せうか、其處をな、我々二人の顔をお立て下さいまして。」
 「そりやもう御懇切なお言葉は、充分承知して居りますが、聞けば持參金云々のお噂を耳にしてな、それでお断り申しますんで、娘には、自慢ぢや御座らんが、充分一家の主婦たる可く資格は備

へさせたつもりです、且ッ嫁入りする支度も、出来だけは、娘の
恥に成ぬやうにしたつもりですが、其お噂さの持参無くば云々で
は、御覽の通り貧乏ですから、持参金附けてまで嫁に遣はす不
具者では有りませんで、ハツハツ、まアお断より有りません、否
もうお氣の毒様で……。」

煙草の煙を、長閑そらに吐いて、眉宇には何等野心とて無い、善
兵衛の言葉に、脇の下の汗を拭ふやうな様子をした。番頭の樋口幸
藏は慌て其言葉を打ち消し、

「め滅相な、爾な噂を誰人がしましたかな、世間ぢや種々な取り沙
汰しますが、そりやもう妬みの噂で、水上家ではお嫁さんの美し

いのや、女學校卒業立派なお嫁さんだと、此様に申して居りまし
て、緑郎の御寮様には、過て居りますてな、早う御夫婦になるの
を待ち兼ねて居りますがな、それに、御隠居様とて、嫁が來たら
早く家を任せて、お伊勢参りやら、御先祖の御墓参をな、樂々す
るのが慰みとて、否、如何なる事がありませうとも、一切御夫婦
間には口を出しませんとな、又怎麼な事が起らうとも、一端女房
とした上は、死ぬとも離縁はせんから、是非にと此様に申して居
りますで、ハイ。」

額への汗を拭きながら、油へ火をつけたかのやうに、熱着した言
葉で、上眼遣へに云ふを聞いた善兵衛は、膝を軽く乗り出すやうに

して、

「ハツハツ、爾ですか、それが眞實なら、今一度考へませうが、必ず其の言葉に相違有りませんな。」

「えッ、彼のヘイ、決して偽り御座いませんで。」

「宜しい、否、種々御苦勞でした。之れよ、誰人が居無いか、御酒の支度を……。」

縁談を承知したらしい、其言葉を聞いた二人は顔見合せて、にやりと笑を洩して、味と胸を撫でるのであつた。

斯ふして、野田家と水上家とは、縁談が約婚で、芽出度の酒宴に移たのである。

青實の梅の枝に、老鷲が訪ふて、去く春を惜むでか、チチと囁いて、裏の竹箴沓く飛んでゆく、

良 人 其 一 仲の良い……

初夏の月が、緑り濃い葉の露を宿した夜、華美しく思ひをのせた結婚が、水上家で取り行なはれた。其翌朝は、何日に無く露が繁く草木に宿つて、朝風が心地よく、寐間を訪れた。

朝飯の了つて、縁郎の後から、立たうとした嫁の綾子呼び止めた。姑の隠居後家は、もの珍らしそふに傍へ引きつけ、嫁入り着を脱で、お召の羽織の荒い柄に、銘仙の平常着に替て、島田鬘の髪が

心持ち亂れた、生々しい姿を眺め廻して、莞爾笑ひながら、

「良久島田醫が似合いましたね、ホッホ、ホ。」

髪かみの結ゆひぶりを賞ほめて、一服ぶくす喫すつた煙草たばこの喫空すいがらを、強つよく火鉢ひばらの側そばで叩たたいて、また煙管きせるへ煙草たばこをつめ、恥はづかしそふにする綾子あやこを、凝眼じょうりと睨返はらして、直すぐ優やさしげな眼めつきしたが、其底そのそこの瞳ひとみには、云いひ知しれぬ妬ねたみの光ひかりが秘ひそんで居ゐる。

「ホ、ホ、まア若い中うちわ、精出せいだしてな、否いやつらい事が有あらうが、幸しん抱いだしてね、頼たのみますよ。」

「ハイ、出來できます限りは、彼の致いたしますから、何卒なす宜よろしう……。」
後あとは言葉ことば無なく、顔かほ赤あかめて、凝乎じつ俯着うつむのであつた。未まだ女學生風ぢやがくせいふうの

抜ひかない、綾子あやこの胸むねには此義母このはが言葉ことばを、優やさしい頼たよりあるものと思おもひ込こんで、直すぐ甘あまへ度たい氣持きもちがした。

「お、宜いいとも、知しらん事は遠慮えんりよせずとな、妾わたしに聞きくが宜いいよ、さアもう用事ようじは無ないか、綠郎りくろうの所ところへ行いつて、ホ、……。」

凝眼じょうり乎りと睨にらむで、煙草たばこを慌あはたしそふに喫のむ、躊躇ちゅうちうしながらも、義母はへ氣兼きかねの遠慮えんりよ……と身みを起おこして、一寸羽織ちよつこの襟えりを直なし、髪かみの後あとれ毛げを捲かき上げて、廊下ろうか傳つたえに、馴なぬ住居すまわの綠郎りくろうが室むろへゆく。

机つくえの上うへへ、兩手りやうてで頬ほを支さへながら、硝子障子がらすしやうじ越こし、庭先にはまきを眺ながめて居ゐた綠郎りくろうは、新妻にいづまの綾子あやこの姿すがたを見るみるより、莞爾にっつと笑えを面おもてにたゞよはして、

「誰人かと思ふたら……綾子だつたか、母様と何話して居たの……ハツハツ、爾悻乎とせずまアお座り。」

「ハイ、彼の母様がいろ／＼親切に、優しくして下さるの。」

「ハハハツ、爾か、そりや良かつた。自家の母様と、お前の母様と何方が一等好だ。」

「ハア、何方も好で御座いますの、ホ、。」

「ハツハツ、爾か、併しね、現在はいしが、これから末長い間に、良い事も有れば、悪い事も有らう、だが、其度に泣いたり、騒いだりせんと、辛抱してくれむでは困るよ。」

「え、身を粉にしましても、必致します。」

「うむ、遣つてくれ、綾子。」

「ハア。」

「まぢツと、此方へ寄らんか、お前の手は白い指だね、いや、昨夜よく知らんかつたが、能く肥て居るね。」

「あれ、貴郎……。」

「近い中に、新婚旅行の真似をして、京都へ行つて見やうかね。」

「ハア、でも母様一人残して……。」

「ハツハツ、母様連れて、新婚旅行が出来るかね、ハツハツ。」

燃るやうな眼で、昵乎見られた綾子は、熱するやうな頬を眞紅に染めて、胸の動悸が急うに、全身を震はして、抱へられるやうに引

月か祭りが来たかのやうに、賑やかさなのであつた。

「こら、座敷の掃除は済んだか、庭も掃いたか、錯雑聲と騒いでばかり居ずと、早く用を済せんか、と云ふ俺も、暢々煙草を喫んで居られんが、どれ掛抽など調べましやう。」

善兵衛は、娘綾子の無事に嫁入つてからあち着たらしいので、今日の里歸りが急に待遠しく成つて、ソワ／＼しながら、時々ひとり喜ばし氣に、笑出すのであつた。

「さア之れで、もう何時もお客様がお出だとして心配有りませんぞ。どれ衣服着替とさませうか、良之助や、お前も早くな。」

綾子の兄の良之助は、妹が望むた嫁入り先さから、里歸りの報知

に接して、何だか危ぶ味の中から、自分のやうな嬉しさに満て、其處等用ありそうに、唯々迷路するばかりなので、好奇心的に、綾子の様子が、早く見度いやうに思はれて、十年も二十年も合ぬ人々に逢ふやうに、千秋とでも云ふ思ひをするのだ。

山裾の霞みの中から四五臺の車が、勢ひ可く走つて、松林の霞みに隠れたが、鎮守社の森の前に現れて、田甫に狭まれた縣道をひた走りに、馳登つて来る。

野田家に集つた。親類縁者等が、雇男よりの報告で、それツとばかり威儀を正し初めた處へ、車の輪たちの音が近づいて、門から玄關まではより以上の車夫の勢ひであつた。

『よくお出でた。さ、早く奥へ、あ、綾子ッ。』

婿の緑郎より。娘綾子の姿を見た母は、先づ胸から湧出る言葉の嬉しさより。涙が先きであつた。

『お母様……。』

車から、降るも早く走り寄つた綾子は、優しい生の母の嬉し涙の云ひ知れの思ひよりは、勝誇つた念のみで、母が涙の思ひを、不思議そうに思はれるのだ。

『ほッ、綾子が、お、に行つてから、見違へる程大人に成りましたなう、ハッハッ。』

伯父の言葉が、何だか斯う大人云々が、女と成つたと云ふ気分

振り顧みながら、緑郎を案内してゆく父の顔を抑ぐと、嬉しげに莞爾して居るが、解けぬ思ひを胸に抱いてるらしい。併し、綾子の現在には、それを何う解そうよりは妻と成つたと云ふ、ある強い意味と、緑郎と云ふ頼る力が胸にあるからで、何等父に對する不安な思ひが無い、唯だもう誇らうとするのみで、座敷へ入つてからも、母に呼ばれるまで、緑郎の顔を盗み見ては、ひとり微笑のであつた。

『綾子、彼方は別に變り有りせんか、お、變り無いか、そりや良、い、お姑様可愛がつてか、我儘はしないだらうね、あ、丸髻は誰人が結たか能く似合ふ、ちよいと立てごらん、ホ、ホ、此衣服は誰人が見たてて。何お姑様がか……。』

眼を睜つて、他人の噂さの鬼と云ふのは虚で、優しい姑様である。唯、もう娘の可愛さが胸に一杯で、活々する嬉し氣な綾子の姿が耐ら無く喜ばしいのである。

「母様、妾ね、お姑様も良うしてくれませんが、緑郎のも善うしてくれませうのよ。」

「あゝ、爾ふ、そりや良い、ホ、ホ、ホ。」

鬚を搔上げて、後毛が蒼蠅いと云ふ顔をする綾子の一舉一動が母の胸に耐らない嬉しさが一杯で

「あゝ、綾子、此所に居たか、だいぶ大人らしく奥様風に成つたな、皆さん優しそうだが、何より結構だ。」

「あゝ、兄様。」

兄の言葉や姿を見た綾子は、妙に涙ぐまれた。昔しの綾子に歸り度い氣分に成つたが、直ぐ妻と云ふ思ひを浮べて、緑郎どの仲を考へるとして、兄の未だ獨身が、何となく貧弱な淋しいと云ふ、或る氣の毒さが浮んで来る。

野田家の親類縁者に取り巻かれて、優遇されては居るが、何だか斯う敵の中へでも放り込まれたやうに思はれて、仲人までが敵の者では無いかと、頼る身うちの後見者等が、頼り氣無く寂しそうである。妻の綾子のせめて傍にでもと、獅子の前へ出た獵犬が、飼主を頼るやうに、奥の方を望んで、耳をそばだてると、高い笑ひ聲が聞

える、若しやと妬む思ひが、胸一杯になり、直として座つて居られ
無くなつた。

庭を逍遙するを口實に、奥の様子でも見やうと立ちかけた處へ、
笑ひを顔に溢ぎらして、酒宴にうつた座敷へ入りながら、縁郎の
傍へ來た綾子は、縁郎の睨むやうな眼の嚴しいに、呀と胸を躍らし
て、哀れみを乞ふ女羊のやうに、體を細めて、縁郎の傍へ座るので
あつた。

妻の顔みて安心はしたものの、面白く無い氣持のまま、ツウと横
を向て、急に我が親類へ勢ひよく話し出す。縁郎の言葉も無く、横
を向れた綾子は、親類等からどやかや嬉しがられを云はれても、そ

れに答へる言葉まで濁つて、絶ず縁郎を盗見るのであつた。

淡い月が、外路に面した老松の枝にかゝつて、折りからの酒宴に
興をそへてひとしきりは、歌と高話の賑ひで、夜を更かすのであつ
た。

姑

其一 (ふわつ痛い)

梅雨の陰鬱な空も、田植の歌も過ぎて、蟬の聲も酷い土用の眞晝
時、三月目の今日は嫁綾子が衣服の蟲干である。

十疊の座敷から、次の室三間ばかり通して、女學校時代の思出を
たどる衣服が、嫁入りの當夜を忍ぶのまで、綿入に袷衣の木綿は無

けれど、紡績が下で絹物とり交ぜ細紐つりならべて風を入れるのであつた。

「ほうッ、大層な衣装持ちでしこと、羨ましいわね。」

釣られた衣服をこぐつて、右左見廻しながら、調べるやうな眼付をする。

「嫁さんは何してるのだから、斯ふ座敷を散らされたら、仕様がなね、優しくすれば圖々しくつけ上がつて、自分の家のやうな氣持で、誰人が此家持ちて居るのか阿呆な、綾子は居ないかへ、綾子ッ。」

「ハイ、唯今。」

一と二た月は、縫物さへさせなかつたが、三月と経た今日此頃は夜業の縫物は遅くまでもさせ、朝は蹴られるやうにして起され、水仕事は雇女の氣の毒がる程、多く成つたのである。呼ばれて臺所から、怖々出て來た綾子は、化粧せぬ顔の蒼白く、汗で襟あたりが汚れて居る。

「何ぞ御用……。」

「何だ、今頃出て來て、先刻から何度呼んだか、お前耳持つて居ないのかへ。」

「濟ません。」

「濟ない事有るかね、斯ふ座敷を散らして置いて、お客様でもあつた

らしようがないじやないか、早く始末なさいな。」

「ハイ、唯今。」

睨む姑の眼を避て、慌だしく綱に手をかける途端、行ふとした姑の肩へかゝつて、嫁入の當夜着た裾模様の縮緬の衣服が、斜めに其顔を叩くのであつた。

「ふわッ、痛ッ、な、何するの……。」

邪慳に、其衣服を拂ひのけて、グツと綾子が持つ綱を引き寄せ、キラリと眼の瞳を厳しく動かし。

「これ綾子、妾を何んと思つて居る、妾は緑郎が母じやないか、其母を邪魔に思つて、蟲干の衣服で打つ法が有りますか。」

「否々、とゞ兎んでも無い、遂い過失で、誠に面目がありません、

濟ません、勘忍して下さいませ、悪う御座いました。」

「ホッホッ、悪かつつて……。緑郎が居ない故、よく打ちた。緑郎が戻つて來たら、能く聞かせませうね、親打つて宜しいか、又緑郎が居る時は、緑郎の傍へばかり寄添て、べたぐ厭らしい真似ばかりして、妾邪魔らしいそぶりするから、今日と云ふ今日は、此辱を付けねばなりませんでなよ。」

「否、濟ませんでした、妾が悪御座りました。何卒許して下さいませし、さつと此後は注意ますから。」

「否、聞きませんよ、蒼蠅ッ。」

釣した綱を、片端から打ち切るやうに、つツと引奪つては投げ捨ながら、冷やかな笑を高く残して、茶の間へゆくのであつた。

「ワツ……。」

と思はず聲擧げて、姑が後姿を眺めたなり。泣き嗚咽ながら、蹴るやうに踏まれた嫁入當夜の衣服を、胸に抱へて涙に濡すのであつた。

茶の間で、何やら姑の干高い聲が聞へたが、それが止むか止まぬ中、足音荒く縁側を傳つて來た。汗にじんだ縁郎の顔は、暑い熱した苦の眼が光つて、づかづかと泣き倒れて居る妻の綾子を見るより其腰の邊りを蹴つて、

「あゝ、綾子、お前は何と云ふ女だ、何の怨みが有つて、大事な母を打つた。」

ハツと縁郎を顧みた綾子は、泣き顔を俯首けて蒼白になつた顔を慄はせるやうに、口を動かしたが、再びワツと泣きながら、

「あれ貴郎、と兎んでも無い、何でお姑様を打ちませう、遂ひ過失で、か勘忍して……。」

睨む綾郎の膝へ縋りつくを、ハツと拂ひのけ、綾子の襟髪を押へて、發つしと打ち拵え、

「阿呆、阿呆女め、汝等に迷はされて、そふ何日までも、甘い顔して居られるかへ、少しばかりの衣服を自慢氣に干しやがつて、よ

くも母を邪魔にしやがつたな、えッ阿呆ッ女ッ。』
足に蹴つて、つういと茶の間へゆく、打たれた綾子は、此頃の姑
や夫郎の變り方が、餘りに甚しく成つたので、蹴つて云つた夫郎の
有様を、泣くより呆然にとられて見送る。

柿の木かきの幹樹みきで、油蟬あぶらせみが聲高こゑたかく鳴き出すと、蝸ひぐらしが鎮守社ちんじゆのやしろの森邊もりあた
で、節悲ふしかなしげに、過ぎゆく日を惜をしんで、鳴き渡わたるのであつた。

姑いづこ

其二 (不安の涙)

露つゆを慕したふ蟲むしの鳴なく音が、庭にはの小篁おすずが根ねばかりで無なく、其處そこの野原のほら
此處こゝの畑路はたみちに、節憐ふしあはれにすだく秋半あきなかの頃ころには、綾子あやこは月つきを物ものを見みな

かつたのである。

五月いづこの岩田いはた帯おびを、芽出めでたく度祝いはいつた翌朝あくるあさは、姑はの機嫌きげんもよく、濱遊はまあそび
にと、綾子あやこや雇男女やこいめのを連つれて、岩屋いはやあたりの濱邊はまべへ出でかけたのであ
つた。

垂水たみづ舞子まいこは、浪なみに隠かくれて、須磨すまの松林しょうりんは霞かすむ彼方むかふに、それと眺ながめ
やられる。熊野灘くまのなだへ流ながれゆく潮うしほが、燈臺とうだい下かに激げきして、壘岩たいいの見みへつ
隠かくれつする。紺青こんせいの空そらに海うみの色いろが、折をりからの帆船はんせんを色彩いろざつて、片かた
帆はの風かぜに走はしるのが、繪えのやうである。

岩いはから砂すなへと、干潟ひがたを傳つたつて、飛とびくくに貝かひをあさりながら、小
魚うなを追おふのも一興ひときようで、始はじめは姑はの機嫌きげんとりつゝ、彼方むかた此方こなたと綾子あやこは

貝ひろふのに餘念が無かつた。

「これ、綾子、其方へ蟹が逃たから早く狩つておくれた、それ小魚が……ホ、ホ、罎も無い……。」

グツと腰を延して、四邊の景を眺めた姑は、裾かきげた綾子の様子子が、女でも艶に惚くとする。心持瘦れた顔へ、蒼蠅そふにかゝる後毛が、一層の色を添へる。妬ましいと云念が、むらくと胸へ湧上がつて、憎い思ひがつのるのであつた。水を散らして、昔の女學生質に返つたらしい、無邪氣な違ひに耽る綾子が、耐ら無い程厭に成つたのだ。

「綾子、注意てんか、子供ぢやあるまいし、バチャ〜水はねるぢやないか、姑母様濡れちやつたじやないの。」

「アツ、濟ません、遂ひ……。」

愕然姑の顔色を覗がつて、神経を痛めたが何日もと違つて、氣にもして居無い様子なので、不安ながらも、胸を撫で下したのだ。

「お、お、ホ、好かない貝だよ、綾子や、他の者に負んど、澤山貝も集めよ。」

「ハイ、此所にも、あれ彼處にも、お、澤山有りました、まア奇麗な貝……。」

岩から巖と、海に干された石傳へに、我れを忘れた綾子は、女學校時代の潮干狩に、明石や舞子を思ひ出したのであつた。

「彼の時……」

茫となつて、浮べる思ひは、女學校時代より先きに、繰り返す舞子の濱の見合い、若い血の燃るまゝ、夫となる人との見合いが、もう其人と夫婦に成つた氣で、戀い耽つて無理から結婚した。

「彼の晩……」

顔を染めて、熱る紅の頬を押へながら、浪に見えぬまでも、其處と惚ぶ舞子を目的に眺めて、六枚屏風に包まれた。夜着の内を思ひ出したのだ。

「舞子の濱で、實はお前を見染たのさ、愛する僕の胸は、此通り火の様だ。」

と胸に抱へられて、自分の夫へ對する愛を疑られまいと、抱へられたを幸ひ堅確と縋り寄つて、嬉しいのみで明たが、里歸りの夜から、急に良夫の心を疑ひ出した。

「父が云ふ、金の……ふ、豈夫……」

と打ち消し……居たが、其中には月のものも見無い、來年の四月頃には、初産の可愛の子を持たねば成らぬ。子さへ有れば……と、自分の良人を疑つたのを耻かしと、熱した頬を潮風になぶらせて、再び貝拾い出すのであつた。

「あゝ草臥た……」

腰を起して、不圖後を顧みれば、姑の姿も、雇男女等の影も無い

愕然して危なく岩からすべり落ちかゝつた足を踏止め、其處等を見廻したが、それらしい影も姿も無し。

「おの様……作助ッ、菊ッ……。」

叫び呼んだが、答へるものは、岩に満て来た潮浪のみで、吹雪と散る泡沫の影ばかり残つて、千鳥が波に飛び交すのであつた。

心細いと云ふ感じが、秘々と胸を襲つて、哀れ氣に四邊を見廻しながら、恐怖の念が胸の鼓動を甚しく叩いて、歸宅後の光景を畫くのだ。

慌て、元休むだ場所を訪へば、焚火の残りのみ薄い煙りをあげて灰と成つた後が濡れて居る。

「お姑様……。」

半ば涙の聲で、隠れ藏むるのでは無いかと悲しい一人身をかこちながら、又呼ぶのであつた。ホロ／＼と涙を落して、取り上げた襦袢を下し、投げ出された下駄をはいて、豈夫潮に海の中へ……とも思つたが、雇男女の居無いので歸つたものと、悄然拾つた貝の効も無く戻るのであつた。

門を入つて、玄關から臺所へゆき、足を洗つて下女等の様子を見たが、淋しい思ひに、恐怖の念の不安が、小さい胸を往來して、何だか家の中が秘默見え、下女下男等から嘲笑されてるらしい思ひがするのだ。

「遅く成つて済ませせん。妾お母様のお戻りを知りませんで、悪ふ御座いました。お許し……………」

後は不安の涙に曇つて、恐怖詫入るのだ。冷やかに、凝目乎眺めた姑は、縁郎の厳しく睨む眼を押へて、

「お、これは奥様で、何の悪い事がありますか、姑の戻るのも知らんで、一生懸命お遊びなのが、妾羨やましゆ思ひますよ、だがな綾子、若し此姑が浪にでもさらはれたら、お前什麼する氣だ、姑の戻るの知らなけりや、必と縁郎の淋しい事も思ふては居まいねえ。」

「否、姑様……………」

「黙言ッ、汝ア母を殺して大事無いのか、えッ、爾だく、斯ふして……………」

發つしど、煙管で髪かみの破れる程、打ち下したのであつた。續いて泣き伏き背中を、姑も縁郎ともト打つて、つういて奥座敷へ去るのであつた。

「あれッ、ま待ッ……………」
と云ひながら、縁郎の袖をそらへたが、

「勝手にせい。」
の棄て言葉ことばをのみ残されて、ワツと泣き聲たて、嗚咽なげきび伏しながら、悲しい儂はかない身の變りやうを、歎なげく涙なみだだの先まき立つのだ。

茶の間の時計が、蟲の哀れとぎれがちに鳴きすだく音と交へてなる。

春の宵 其一 (額へ煙草の……)

潮流の寒風が、熊野灘を越て、由良海峡を過ぎて師走の頃から吹き始た。霜柱を折る音が、背戸の簾垣邊りに聞えて、何處から渡つて來たか、野猿の鳴き叫ぶ聲が、寒空に響へ哀れ悲しさの身に沁る。春とは名のみにて、日和とて寒い正月を迎へた水上家では、遠く神戸大阪邊りから、年頭の客や宿り客が在つた、久しぶりの賑かさに返つた。

人の妻と爲つて、始めて正月を迎へた綾子は、赤い手柄の丸鬘も相應い姿に似合ふのであつた。歳暮を越て、多忙のにまぎれたか、姑の睨みも、縁郎の叱り聲も無く、元旦を芽出度済した今日の三ヶ日、夕飯も済だ後の手持ち無沙汰、それも夫郎なりが居たならまだしも、奥座敷で大阪の客を相手に笑聲を交へた何やらの物語り。ひとりものけものにされたかのやうに、哀れげな寂しい氣分のまゝ、ビク／＼動くやうに思はれる。腹の嬰子の居るあたりを押へて、出産てふ時の不安よりは、生れて後の楽しみを、夢のやうに浮べるのである。

『若し、お奥様……若し。』

不圖女の聲を耳にして、夢から醒たやうな綾子は、呼ばれた後を振り顧ると、下女の花が躡居つて居るのだ。

「アツ、誰人……お、お花なのかい、奥で呼んで居ましたの……。」
 狼狽して立ち上がるを止めて、

「否、彼の……お閑で御座いますか。」

「ア、奥でも呼びぢや無いの、別に用も有りませんが……。」

「爾ですか、では怎麼で御座いませう。妾等も、もう御用も済ましたから、女子衆ばかり集めまして、かるたか雙六か、何か出来ませんでせうか……。」

「ホ、ホ、お正月だから、雙六か歌留多でもしやうと云ふのかへ、

爾ね、姑様や縁郎のに叱られると困るが、御用も無くば、ひとしきり遊んだら良いでせう、妾も入れて貰いますわよ。」

「ホホ、爾ですか、お竹さんもお梅さんも、奥様からお許し出ましたよ、早くそれ持つてお出でなさいな、此所で始ますから……。」
 「そふでしたか。」

「奥様宜う座御いますか。」

「ホホホ、心配しなくつても、始めたらいよ、若し姑様や縁郎のが叱つたら……、妾お詫しますからね何かお菓子でも……。」
 多少不安は有つたが、正月の事だし、女中等に樂ませるも家の爲めと、戸棚から菓子を寄せて、雙六の上へ並べ置ながら、先づと駒

を手にしたのだ。すると、聲もなく後襖間が開いて其駒を、横から突如に取上げて、臺所へ投げつけた者があつた。

「あれッ何……。」

振り返る綾子の額に、煙草の空壳を投げつけて、酒の息臭いのを吹きかけ、厳しく睨むだ縁郎を見上げ、

「あれ貴郎……。」

愕然として、哀れを請ふ不安の思ひを寄せ、涙ぐむのを冷笑して投げ捨てた火を消そふとする女中等を睨むで、

「フ、フ、阿呆め、遠方からお客様もある多忙いのに、よく雙六なんて、子供の真似が出来たものだ。もう直き母と成る身ぢやない

か、阿呆も良加減にしろッ、おいつ、お花もお竹も、皆何してるんだ。ごてく騒がしい、彼方へ去つて残つた用などせんかい。」

「へえッ……。」

怨めしそふに女中等は縁郎の顔を仰いで、口の中で何やら云い、臺所へ入つてゆく。

「阿呆揃め、自分の家だと思やがつて……、こら綾子、お前だつて爾だぞ。女中の者が始めたら、奥へ氣を兼ねるが眞實ぢやないか、自分から先きになつて、それで主人の資格が有るかい、ホッ、泣いてやがるな、こりや可笑、良人に叱られて、怨むで泣くのだから。勝手に泣けく、腹の子だつて爾だ。僕の子だく云ふてる

が、誰人の子だか知れたものか。」

「えッ、あッ貴郎ッ。」

他人の子とまで云はれては、此綾子が心が承知出来ぬと、嘲罵にも程がある……。ワツと怒めしげに泣いて、夫郎に縋りつくのであつた。

「えッ、汚らはしい、さはるなッ。」

縋る手を拂つて、腰の邊りを丁と蹴る。

「あれッ、貴郎……貴郎は怎麼して……此頃は……お氣に入らなければ……悪い所……は直しますのに……。」
と涙に嗚咽ひで、ヨ、と倒れながら泣く、

「ホッホッ、誰人が泣くのかと思つたら、又涙もろい綾子ぢやないか、氣に入るとも入らんも、夫郎に隠したり。姑に内秘で里へ手紙遣つたりするからだ。憎いつちや有りやしない、妾はな、縁郎が大事だからね、お前も里が大事だらう。ホ、ホ、。」
何時か姑までが、出しもせん里への手紙云々を口にして、縁郎の手を執ると、泣き伏す綾子を尻眼に笑つて、奥の茶の間へ去く後は、大風の去つたやうに、唯だ忍び泣く綾子が聲の嗚咽るのが、廣い邸内の静寂な夜を破る。

春の宵 其二

(貧乏縁を……)

梅が咲いた。二月の中旬頃、蘇生たやうな暖かい春日和の光りは彼の灰色の空を拭ぐつて、薄霜解の路が、軽い蒸氣をあげて、溜りの水さへ温そふである。

斯う梅の枝が、花をつけて庭隅に在る。僅ばかりの吾妻屋の軒をかすめて咲き、心無げに眺めながら、縁郎と母の二人は、睦まじ氣に何やら聲を秘めて語つて居る。

洗ひ物を干して、手を休めた綾子は、不圖垣根越に洩て來る。庭からの夫郎と姑の聲を耳にするのだ。

聞く人ありと知らぬ母子は、時々高く笑つては、くどくど語り合ふのである。

「だからさ、今も云ふ通り。世通の前も有ればこそ、持參金も取ら無いで、彼の綾子を嫁に貰つたのだ。それもお前が鼻つたらしたから、彼の女が一人のやうに騒ぎまはつてさ、母様も眼を眠つて貰つたのぢやないか、幾ら女學校卒業したからつて、彼の位の女は世間に幾らも有るぢやないか、よう考へて御覽、之れだけの財産を、妾が死んだ後は、他人の彼の綾子も費ふのだよ。阿呆のお前のこつちやで、それを知らんと濟す氣なのかへ、お前位の立派な男へなら、持參金の二萬や三萬持つて、妾もくと嫁入りしたい女は他に、澤山有るぢやないか、教育が無くつても、お金持つて來る女だつたら、家の爲めぢやないか。」

「そりや僕だつて、知つてますがね、もう子供までお腹に……。」
 「爾りや知つてますよ。けれどな、昨日も里方から手紙あつた通り
 綾子の父親がもう近中に、死ぬそうぢやないか、死んだらもう兄
 の良之助さんと嫁さんだけで、愚圖の阿呆のやうな母が居たつて
 何の頼りに成りものか、今の中によろしく考へて置んど、貧乏くち
 を背負てたんだよ。」

「えへ、そやだつたら困りますな、怎麼しませうか……豈夫直ぐ
 離婚も出来ませんでな……寡め出しませうか。」

「阿呆だね、確りせんかい、おやツ、番頭が来たやうだ。ホウ幸藏
 かい、何か用でも出来たのかい。」

話半ばに、一家の整理的役目を以た。番頭の樋口幸藏が用あり氣
 に、吾妻屋を訪れるのであつた。唐淺の羽織の襟を返しながら、揉
 手をしひく近寄つて、

「へえ、彼の若奥様のお里から、使の者が見えましてな、大旦那様
 が御危篤ですつて、直ぐ来て貰らい度いと、迎ひが参りましたの
 で。」

聞くとも無く、姑と夫郎の話立ち聞かぬ處へ、番頭の幸藏が、里
 の父親の病氣危篤と耳にした綾子は、愕然思ひ出すと同時に、妊娠
 の嬰兒が動くか、急に痛み出して、氣が遠く成るやうな、悲しい心
 の苦に、思はず耐へて居た涙と、もに、聲出さじとする唇ろを洩て

ヨ、と胸を抱へて、泣き倒れるのであつた。

其聲を聞いたか、顔見合した母子は、舌打ちも口の中で、慌たゞしく裏へ駆けつけ、痛む胸を抱へて居る綾子の後へ座り。底光りする眼の尙ほ冷やかだが、聲だけは優し氣に、

「お、怎麼かしたの綾子、腹でも痛むのかい、どれ撫つて上げやう……。」

「確りしないか、これ綾子、怎麼したんだ。」

「ハイ、今洗つた衣服を干し上げますと、急に……胸が痛んで……」

否、姑様、もう宜しゅう御座います……。」

と背を撫でる力も、憎しみが籠つて居るかと思はれて、神経の興

ぶつた綾子は、撫でらるゝのが、恐ろしいのだ。緑郎の心配げに傍に立つのも、努では無いかと、慮りで在つたらしい愛を疑ッぐて、又ヨ、と泣き嗚咽ぶ。

里 へ 其 一 (裏で細つた父の)

鶯が、椿の眞紅な花を落して、隣の咲ほころぶ梅の枝に移り替つて、二三聲高く鳴ひて去く後から、野田家の霜柱を破て、二三臺の車が、勢ひよく入いつて玄關に止まるのであつた。

出迎へた者等は、降り立つ醫師と親類の人なので、もう足り無い様子が見えた。案内されて醫師は、親類の人等を次ぎに止め、す

うツと病室へ入つてゆく、

『什麼ですな、御氣分は……。』

病人の枕元へ座つた醫者は、優しくに主人善兵衛の脈を見て、眉をひためたが、莞爾笑つて、検温器を脇の下へはさませる。

『若し大久保さん（看護婦の名）昨夜からの経過は什麼ですな、別に……。』

『ハイ、同じお熱を往來して居ますが今朝……呼吸に變則が有りまして……。』

『うむ、爾でしたか、宜しい尙ほ注意で……。』

検温器を取り上げて、凝乎見ながら、看護婦へ注意を與へて、次

ぎの室へ退くのを待ち兼ねた、子息の良之助は、憂はしげに醫者に対して、其善惡を聞くのだ。

『左様、まア注意が第一ですな、併し、今日一日の経過を見んと、

什麼も明白申し上げられんが、御病氣が病氣ですから、一時に閉

鎖否魔痺が起ると、もうそれが終りでせう。御心が確りして居ま

すから、まア今日まで持つて居らしやるのです。否、一寸一二間

患家を廻りますから、之れで失禮致しませう。もしもの事が有り

ましたら、お迎へ下さりや何時でも……。』

氣の弱い母は、醫者を送り出すと、もうほろ／＼涙を流して、嫁のお清が慰めの言葉も力に成ら無い、茶の間でうつ伏したまゝ泣き

出すのであつた。

「お母様、お父様が何か……。」

病室から、慌しそりに茶の間へ来た。良之助の言葉に急たてられ、涙を拭ひもあへず廊下を経つた。善兵衛の病室へゆく、

「あゝ貴郎ッ。」

「うむ。豊か、彼の綾子は未だ見えんか、綾子に一目會つてゆき度い、た頼む、うむ、くゝ苦しい。」

「ハイ、今呼びに、否、迎へに遣りましたから、もう戻つて……程なく参ります。確りしておくんない……。」

「うむ、うゝッ、早く逢いたい。」

「ハイ、良之助、今一度誰人か遣つておくれな。」

肥た昔の面影なく、げつそり瘦細つて、蒼白い顔の力なく、鈍い眼をハチツと睨つて、空に何やら求めるやうに、細い骨ばかり成つた手を延して、胸を掻くやうに苦しそうな聲をあげる。

「うむ、ア、未だ綾は來んかい、あゝ、もう會まい、會んどゆかう、他人に遣つた者を、そう無理にも……あゝ……呼べまい、若し私の亡た後で、彼の……綾子が來たらなら、體を大事に……よう家の爲め盡しなどな、それからなら、疲痛どころが有らうとも何れは自分の世にも成る程に、勘忍が第一ぢやと……云ふて……あゝ……初孫の顔も見たいが……。」

ホロ／＼と、頬骨の高い端を、涙が傳つて、枕を濡すのであつた。
 『お父様、そう氣が弱くつては、皆が悲しく成りますよ、確りして
 下さいましな、もう綾子も参りますから……。』

『ア、うむ……。』

自ら両手を組で、もう死を覺悟したか、良之助の慰む言葉に答へ
 無くホロ／＼と流を流すのみであつた。

『お父様確りして……。』

『うむ、お清か、母様を……大事にな……あ、綾が可哀想だ……。』
 ワツと泣く良之助の妻お清に、義父が心中察し遣つてか、綾子の身
 の上を浮べて、ヨ、と嗚咽び泣く、

『これ清や、何泣いてるのだ。病人の枕元ぢやないか、お父様のお
 體の爲め、注意んといけないぢや無いか。』
 たしなめる良之助も、耐らぬ悲哀が胸を襲をて、泣じと見守る目
 から、點々と涙の雫を膝に印すのであつた。

危篤に瀕せる、善兵衛を取り巻いた。親類一同も共に其悲を別ち
 て、袖を濡すの處へ、俥の輪ちの音が、玄關に止まると、虫が知ら
 ずか、善兵衛はバチツと眼を開き、薄ら笑を頬に表して、涙が溢れ
 出るのだ。

忍ぶ音ではあつたが、急くと見え、廊下を傳つて来る足音と、衣
 ずれが甚しくして隣りの室で止まると、スウツと襖間が開いて、良

之助の妻の案内で、野上家へ遺つた娘の綾子が其待たれた姿を現すのであつた。

「お、綾子か、よく來られたね、お父様がお待ち兼だ……。」

「ハイ、濟ません、お父様の御容體は……。」

「さア……。」

眼で何やら云ふ、愕然、兄の顔を打ちまもつた其目を、父の枕元へおとして、

「お、お父様つ、あや綾子ですツ。」

ワツと絶りついて泣く、何か云はふとして口を動かした父善兵衛は溢り出る涙のみで語つて、

「お、綾だつたか……よく……來てくれた、私やもう逢へまいと思つた。體に變りは無いか、あ合度かつたぞ。」

「お父様、妻だつて、毎日逢度う思つても……妾が悪ふ御座いました、兎んだ親不孝を致しました、か、勘忍してくださいませ。」
骨だつた。瘦細つた父の手を執つて、變り果た姿を目當り見る綾子の心中は、さながら油の燃湧き立つ思ひがして、胸の切ない苦の憂いさと、現在の身の上の悲しさを、什麼止めやうとしても、涙の流し出て、唇を噛む齒を洩れて、ヨ、と泣き鳴咽ふより他無かつた若し父亡き後の自分は、母と云ふ船は在つても、兄の許ばかりにも頼れ無い、殆ど廣い海原をゆく、暴風雨の中の船乗りである。

「噫々。」

と歎息を吐いて、安心したかのやうに眠りながら刻々と去く、父の壽命も自分を見て逢へた嬉しさに、早くちよめたのでは無いかと體を慄はせて、煩悶泣く綾子を察してか、再び眼を開けたが、もう息のかすかに成つてゆくのだ。

颯つと霜風が、暮れた家の戸閉りにあたつて、がさ／＼と音をたて、簀垣を騒がしたまゝ、遠く山へ吹いてゆく。

里

へ 其二

(良人が胸の思恋)

ホロリと散る、梅の花びらの下で、亡父が棺を送葬出して、再び

巡り合ひ、永久の別れに眼を泣き脹らして、其夕月を背に、悲しい思ひを乗せて、苦の家へと綾子は戻つたのであつた。

親類や母兄等から、死目に來ずとも、せめて送葬ぐらゐに……と怨むた言葉が、亡父の別れの遺言よりは、深く胸を痛ませて、無情き縁郎が仕打を恨み、涙見せじと急ぎ姑へ戻つたを告げた。

火鉢を抱へて、淋しそふに煙草を喫んで居た姑は、綾子の戻つたを知つて、ボンと空売をはたき、

「おゝ戻つて來たかい、聞けば亡くなられたそふだが、お氣の毒のことだね、お前も悲しからう……、さゝ早ふ休むだが良い、唯だの體ぢやないからね、妊娠に障りが有つたらしやうが無いよ、な

何を遠慮が有るものか、あゝ氣の毒な事ぢや。』
眼をソツと拭つて、佛壇を振り仰ぐ、

『遅ふなつて濟ません、家で皆さんへ宜ろしく申して居りました。
分て奴様お年召して居やはりますから、お大事にと申して……。』
手をつく嫁の綾子を睨むで、唇ろを慄はせながら、煙管を投げ出
して、

『ホッ、爾かい、妾も年老りましたからね、ホッホ、お大事につて
かい、まアお氣の毒なこつちや、妾もな、早う黄泉へ去きたう思
つても、獄道ものと見えて、地獄の鬼まで愛想を盡したらしいの
でどうもお氣の毒ですわね。』

『あれお姑様、何云いますのよ。』

『否、何も云つてやしませんよ、ホッホ、お氣の毒ついでや、一寸
佛壇へお燈火上げておくれ。』

『ハイ。』

亡父が暖かい、情の懷中で育つた綾子は、此世からの地獄とかへ
陥て居るのでは無いかと、我身を疑ひ乍ら、佛壇へ燈火を點けて、
仙香をたてつゝ口の中で、亡父が冥福を拜むで、振り返る後に綠郎
が何日に無い、眞赤な顔の酒息を臭く吹きつけ、

『ホッ、之りや感心だ。ウーイ、今日はお父様のお送葬だつてな、
ゲツブー僕も行かうと思ふてな、途中まで行たが、へんな氣がし

てなしようが無いから、明石家へ行つて、久しぶりでウ、イ……うむ、藝妓を上げてな、お酒飲で勢ひつけて出蒐けやう思つたんだらう、すると鶴吉藝妓が若い者が、阿呆らしいお送葬も有りますものかつてあゝ酔つた、ゲエツプー。』

『えッ……爾でしたか。』

袖を嚙で、怨めしげに緑郎の顔を仰ぐ、緑郎は、火鉢の姑の前に座つて舌なみぶりながら、母の顔へ臭い酒の息を吹きつける、それ避るやうにした母は、綾子を凝乎睨むで、

『あゝ、もう什麼もならん……、可愛の緑郎だつて、嫁の來ん中はそりや姑を大事にしだものだが、嫁が來てからと云ふものは、妾

を邪魔にして……嫁をいぢめもせんものを窘めたかのやうに、妾を怨むで茶家遊びするのだそう、折角妾の志と思つて、綾子の父様の葬式に遣れば、あゝ……もう閻魔様から早ふ迎いに來て貰いたい、南無阿彌陀佛……。』

緑郎の顔見て、ホロ／＼涙を流しながら、佛壇近く這い寄つて手を合せるのであつた。

『お母様、僕が何んで邪魔しました。そりや違ひますぜ。えッ、汝が餘計な事しやがるからだ。父親の葬式でたらなくて、家へ歸つてからも、燈火室たり、仙香あげやがつて、めそ／＼泣きやがるからだ。えいッ、彼方へ去て泣きやがれ。』

煙草の箱へ手が懸ると、突然振り上げさま、綾子目かけて投げつける。身を代し損なつた綾子は、頭から煙草の粉を浴びて、泣きながら詫るのであつた。

「えッ、阿呆、だがな、昨日母様と話を在つたが、ウ、イ、彼の父親さんが死んで、何だその、形身別けの金は幾ら有つた。早く持つて来い……ハッハッ、否、お前は可愛女房だよ、母様怒がるのも無理ない。ハッハッ。」

「緑郎、お前母様の前で、何云ふてるのだ。怪しから無いぢやないか、ホ、ホ、まゝ宜いは、若い中ばかりでな、だが其遺身分は……ホ、ホ、貰ふとかなとな、後生の爲めに成ら無よ、又緑郎だつた、

什麼に喜ぶか知りやせん、大阪の伯父御が来ない中に、早く貰つてきなさい、悪い事云やしないよ、あゝ明日行つて来ても良いからね。」

「うむ爾だく、伯父の来ん中が宜いぜ、ハッハッ、ウ、イ、あゝえらく酔た。綾子、水持つて来いッ。」

「ハイ。」

と答へた綾子は、悄然と臺所へゆき、居眠りする女中を羨ましく眺めて、茶碗に水を盛つたまゝ、茶の間へ戻る心の中には、直ぐ金々と云夫が胸の思惑、若し金を持つて来たなら、一家和合は知れてゐる。併し、金の無くなる折見て取上られたなら、それが夫婦の別

れ……噫々……妻ほど不幸な女が有らうかと、思はず歎息する前へ
 「何してるのだ、阿呆ッ。」

盛つて水の茶碗を引奪つて、グツと一口飲んだ餘りを、ザブリと
 茶碗ともぐ打ちつけられた綾子は、身を切られるより切無い胸の
 悲苦が、一時に破れたかのやうに、ワツと泣き倒れる。

「空木の暗き木の間より……。」

端歌を口に、縁郎は踏む足危なげに、奥へゆく、其後を見送つた
 綾子は、不如婦の血の吐く悲痛よりは、妊娠の身の現在を悲歎する
 後に、姑が冷やかな高笑ひをを浴せる。

茶碗の水を懸けられて、濡た衣服よりは、苦しい涙に濡れる方が

身に秘くどこたへる。

出産から 其一 (袖囁みしめて)

桃咲いて、彼岸櫻が蕾を含ませた。三月も末日の春雨の晴れた朝
 蘇生つたやうに萌初めた柳が、花の粉を匂はせて、微風の暖かさに
 散り飛ぶ、ほがらかな春が地の此所彼所を訪ひ慰さめるかのやうで
 あつた。

酷愆の他、愛の無い水上家へも、春は一樣に訪ふた上ならず。春
 の喜びを重ねたのであつたが、何故か、春らしい気分が漂よは無く
 て、霜柱裂立する極寒のやうに、一家は母子以外暖かい笑が交互さ

れなかつた。

長火鉢に寄り添った母は、眉を寄せて奥を睨み返りながら、取り上げた新聞を、投げ出すやうに下へ置き。

「チョツ、騒ごしい、蒼蠅ぢやないか、ちと泣かせんで置き、嬰兒が出産たと思つて、此頃何もせんで、彷徨してばかり居て、妾なんかも産したかつて、三四日より寝やしませんぞ、今時の女達ア衛生だ何だつて、我儘ばかりして居る。ちと啼かせんで置ておくれ。」

舌打甚しく鳴らして、奥へ聞こえがしに怒鳴る。椽側で楊子を使いながら、門の右側に咲き亂れた。緋桃の花を眺めで居た縁郎は、

母の言葉が振り返つて、

「母様、どうも濟みません、今叱りつけて來ますから、よく泣かせ

やがるな。」

楊子を嚙で、吐き出すやうに庭へ放つり出して、突如ど、奥まつた小座敷へゆく、

亡父が葬式も、初七日も濟で、味と息を吐いた夜から、間もなく蟲がかよつて、一日置いた三月三日の雛節句の朝、水上家の總領が産れたのであつた。

一家は、それを喜ぶ可き筈なのが、反つて會計な者は出産たかのやうに思つて、春が來たとして春らしい暖かい氣分が、水上家には漂

よはないのである。邪魔くさい、騒どしい者がど、肝心の初孫を喜ぶ母は、抱かるとも見やうともしない、蒼蠅がつて、綾子の産室へは見舞も寄りつもしなかつた。

『おい、綾子、何故嬰兒を鳴かせるのだ。黙らせんかい、母様が騒どしいつて、怒つてるぢやないか。阿呆め。』

『ハイ、濟ません、黙言くら思つても、乳呑まそうしても、蟲でも起りましたか、什麼にしても、泣き止めませんので……。』

『何だ、蟲が起つた。阿呆いえ、乳を慾むで呑ませんのだらう、爾だ。必と爾だ、え、ッ俺が嬰兒だぜ、否、爾だらう、僕が此頃他で遊ぶから、妬もちやいてるのだう、い、僕は怒むで爾するの』

だらう、え、ッ、爾だ。』

『否、と兎んでも無い、決して那麽事ありませんわよ、嬰兒が六づかりますんで、妾什麼出来ませんですわ、何で乳慾みませう貴郎の兒ですもの、可愛くつてなりませんわよ、貴郎も、我子と知つたら、少しは……。』

『えッ、少しは……へッへッ、什麼したんだい、面白い、其れから先きを聞きたいな、へッへッ、云へないだらう、阿呆め。』
怒めしそふに、縁郎を仰いで、銘仙の羽織の袖で涙を拭き、泣かせじと乳房を無理にも含ませながら、凝乎嬰兒の顔を眺めて、ホロ／＼涙を流す。

「ヘッ、云へまいが、其ら見ろ、乳呑んだら泣き止むだぢやないか
阿呆の虚つきめ。」

「えつまア貴郎は……妾を……妾をもう愛してくれないのですか……」

「えッ、愛さない、ハッハッ、愛が有るから斯ふ家へ置くのぢやないか、愛が僕より無くならせやうとする、お前の愛が虚りぢやないか、否、お前が阿呆で、悪いのだ。ヘッヘッ、什麼なもんだ。」

「まア……。」

眼を睜つて、縁郎を見上げる綾子の胸は、怨めしいが溢れて、口が聞かれなかつた。

「若し、旦那様え、若奥様のお實家から。」

「えッ。」

振り向いた縁郎は、女中の後から綾子の母と、兄の良之助が見舞がてら祝いに來たのであつた。此場の仕打ちを見られぬ中にど、程良く挨拶を交して、つういと縁側へ出る。そして、中の様子を覗ひながら、小聲で歌を唄つて、多少良心の苛責があるか、轟く心臓の鼓動を鎮めるのであつた。

「能くまア母様と兄様、來てくださいました。實家は別に、お變り有ませんか。」

「うむ、別に有りませんが、早く嬰兒を見ておくれ、ようまア肥て

縁郎さんに生き寫だね、お、よし、お前の祖母ちゃんだよ、ホ、又眠つてしまつた、併し綾子や、産後から別に、變りは無いかえ。」

凝乎見交す母娘の眼には、云い知れぬ涙が溢れて、ホロ／＼と言葉なく落るのだ。

「綾子、何か用でも有つたらな、遠慮せんと云ふて來や、出來る事ならして遣るからね。」

「ハイ、兄様、京姉様お變り有りませんか、父様はもう亡いのですから、兄様、母様獨りぼつちで、妾什麼してもう出來ませんからね、代つて能く大事に頼みますわ。」

ソツと、袖を反して涙を拭き、凝乎兄の顔を見上げて、悲哀の胸を語ろうとするが、唯だ悲しい現在のみの涙と化して、止め度なく溢り落つる。

「うむ、實家の事は心配せんといよ、嬰兒を大事に體を注意んどいかんよ、それにな、お姑は尤も大切だて、何事もハイ／＼云ふ事聞いてな、又縁郎さんも之れから頼らんけにや成らん人だから妻たる道を能く盡して忘れちやならんよ。」

「ハイ、種々有りが度う御座いました。妾必と兄様の言葉を忘れませんか、何日まで妹と思つて……。」

「綾子、もう何も云はんと置ておくれ、聞く妾が悲しく成つて……。」

だが、お前産後の何もあらうが、昔と變つて、大層瘦たねえ。』
母のホロリと落す涙に、思はず聲たて、泣き度かつたが、縁側の
良人の振り返つた姿を見るより、泣かじと袖を噛み締めて、心を
煩悶苦るしむのであつた。

『まア、野田のお母様に、良之助様でしたか、能う尋ねてくれまし
た。これお花や、お茶など早く入れないかへ、ついでに戸棚の
菓子もな、あれ菓子や、お前は立たなくとも良いよ、産後もたん
ど日數経たないのでから、體が大事だよ、ホッ、嬰兒は良いね、
祖母様に抱れて……。』

世辭とは知つたが、久しぶりで聞く母が優しい言葉に、春が一度

に訪ふたかど、折りから入へつて来た良人を仰げば、ツウンと横を
向いて、母の傍へ坐る。

温かい風に乗つて、緋桃の花びらが、一二づゝ縁に飛んで来て、
春を告げるらしかつた。

出産から 其二

腰の邊りを眺……

山櫻の花が、去く春風に乗つて、僅に其名残らしい、色のあせた
花びらを、力無く地へ敷いて、さら／＼と砂に交れるのだ。

表へ面した、茶の間へ番頭の樋口を呼んで、母と緑郎の二人は、
何やら相談に耽るのであつた。茶の間から僅離れた。日和りの良い

縁側で、嬰兒の寐た間を幸ひと、裁縫を始めた綾子は、時々聞へる咳拂ひを耳にするのみで、嬰兒と自分の未來を考へて、それに餘念が無いのであつた。

「嬰兒の出産迄と、まア今日まで辛抱して居たが、大阪の銀行の重役様の娘さんからな、是非に縁郎の所へ嫁度いとな、毎度のやうに騒ぐのだそふで、それに娘さんの持參金としてな、二萬圓あるとか、容貌だつて、自家の綾子さんよりは良いそふだで。早く綾子を何うかしたいのだが、幸藏の考はね、善い智恵貸しておくれな。」

「へえ、けど御隠居様、綾子はん貰ふ時、えらい約束が有りました

のでな、離別しなざる事出来ませんでせう……ね。」

「阿呆、阿呆ぬかせ、什麼な約束結むだが知らんが、もう綾子の父親だつて、死んでしまつたぢやないか、心配しなくとも、何とか智恵母様に見せるのが、番頭の忠義ぢやないか、何の爲めに自家から月給貰らつて、銀行へ勤めて居るのだ、考へて見い。」

「うへえ、誠に阿呆で、すみませんけどな、私だつて無い智恵は出ませんので。」

「其處を頼むのだ、確りした事遣つておくれんでは、もう銀行へ置きやしませんぞ。」

「うへえ、そそりや御隠居様、無理ですぜ、へい〜何とか考へど

さませう。』

「何どかつて、そふ待つて居られやしないよ、早くせとん折角の縁談も破れちまふわね。』

「うへえ。』

「左ア幸藏、早く綾子を離別出来たら、お前の月給も昇らせてやるぞ。』

姑ど、縁郎どが、幸藏を相手に、自分の事を話したので、思はず聞けば、何處からか、又嫁を買つて、それ持参金……自分持参金どころか、遺身の金さへ未來を思つて、貰い來無いから離別……愕然身を慄はして、姑や良人の現在を思つて、思はず唇ろを噛しめ

怨めしいと思ふ涙に嗚咽ぶとたん、寢かした嬰兒が、何の夢見たかワツと泣き出したので。

「お、嬰兒……。』

と思はず。口を突いて出る言葉に、茶の間から顔を出した姑は、綾子の座敷へ行かふとして振り返る顔どが、ハタと出合つたのであつた。

「綾子、お待ち。』

「ハイ、唯今、嬰兒が泣いて居ますから。』

「否、泣いて居たつても、まアお待ち。』

「ハツハイ。』

「今も前其處で、何して居たのだい。」

「ハイ、お姑様のお羽織を裁縫して……。」

「えッ、妾の羽織を……態々妾等の相談して居る傍でかへ。」

「いえ、襟側は日和りが良いものですから……。」

「まア、口は重寶だね、否、妾達の話を知ることと思つて、態々其處へ来たのだらう、否爾だく、縁郎や、お前が餘り甘いやからだ。」

「いえく、飛んでも無い、何んで立ち聞きますものでせう、一生懸命裁縫し居ましたので、他人さんの話が耳に入りますものでせうか、お、よし、今母様行きますよ、優柔く待つておいでへい、決して……。」

「えッ、黙言んかい母様に口返して、親不孝ぢやないか、あれまた嬰兒を泣かしよる。くそッ、此の河呆が……。」

其處に在つた。物尺を取るより早く、發しと綾子の背を打ち、尙ほ足らずとてか、足を揚げると腰の邊りを蹴かへすのであつた。

「あッ、あッ。」

叫びを後に、縁から轉りと下へ蹴られる途端に、落倒れて太く腰を打つた見え、暫時は起き上がれ無かつた。

「もう汝には、彼の嬰兒は預けられんから……他へ頼むぞ、爾思つてろ。」

馳せ込むやうに、母戀し、乳慾しと、泣きたる嬰兒の室へゆき、

抱き上げた縁郎は、起あがらうとあせる。綾子を冷やかに眺めて、
 「什麼だ。他へ遣つてしまふぞ、良かか。」
 「あれ、あつ貴郎ッ、妾が悪ふ御座いました。か、勘忍して、之れ
 から必と注意ますから……其嬰兒だけわ……。」
 「注意る。阿呆め、注意るくづるづて、何度詫るのだ。え、よく泣
 く嬰兒だな、さア黙言かい、え、いッ蒼蠅嬰兒だ。汝も母親に似
 て、よく泣きやがるぞ、黙言んけりやりやさア勝手に泣けッ。」
 と放り出すやうに、縁側へ投げ出して、止めやうとした幸藏を睨
 らうで、母と顔見合せ、莞爾と笑ひながら、再び、茶の間へ入いつ
 て、障子をびつしやり荒く閉めるのであつた。

「お、よし、泣くなく、泣くなく、妾がみんな悪いのよ、勘忍してね、
 お、乳か〜。」
 泣く我子の口へ、乳を舂ませる母親と成つた▲子は、子を以て知
 る親心を、痛切に知つて、教への師が言葉を思ひ浮べて、泣じど斜
 めて空を仰げば、五月雨近い時季の雲あしが早くて、今にも降りそ
 ふに曇つて來た。

秋の家 其一 (瘦せた〜ッて)

酷暑の土用も明けて、二百十日の暴れも無事に、裏の柿實も色づ
 く、初秋の頃と成つたが、眞晝どきには、残暑の身をやくやうなど

きも在つた。

茹込れに間近い田畑を眺めた。野田家の茶の間では、母を頭に相續者の良之助夫婦が、雇男女達を相手に、三時の茶を呑み合ふのである。

佛壇を仰ぎながら、眼をしばたいて居た母は、良之助夫婦が、優しくしてくれるのを喜びつゝある中に、人知れぬ涙を浮かせる。

「ハツハツ、また母様泣いて居ますな、そふ氣が弱く成つては、體を悪くするぢやありませんか。」

雇人に冗談云つて居た。良之助は早くも母の涙をみて、氣を屬ますやうに云ひ、妻のお清へ眼くばせして、母の茶碗へ茶をつがせる。

「ア、お前達夫婦がな、能う妾が面倒見てくれるので、遂い綾子の身を考へてな、ホッホ、可哀想で什麼も成りません……。」
ソツと涙を拭く、ハれを打ち消すやうに、良之助は高く笑ひ出して、慰安顔に、

「ハツハツ、何を云ふのです、他人に呉れちまつたものを、今更ごたく云ふたどて、そりや覺悟の前ですもの、綾だつて爾です。世間の噂のやうに、打たれたり。叩かれたりよしあつたどて、女は家が無い、至ら無いからだど、反つて良人大事にしますよ、けれど、噂が眞實なら……綾の方から何とか云ふて來ますからね、それを……何にも云ふて來ませんのですもの……ハツハツ、嘘で

す。噂うはさは兎角とかく妬ねみから、云いひたがるもんで、なアお清せい……。」
 「へえ、爾そうですども、綾あやさんはお氣きの毒どく……否いな、母様かあはん、妾わたしが綾あやさん
 に變かはりますかね、そふ心配しんぱいなさるな、さゝち茶湯ちやとうあ上がりなさい
 ませ。」

「そりや噂うはさも有りませう……が、先達せんだつ尋ねたとき、大變瘦たいへんやせて居ゐま
 したが、それ考かんがへると……斯こふして御湯おちやう呑のむのも……。」
 取り上げた茶碗ちやわんを口くちから放はなして、ホロ／＼と嗚咽なみせぶ、良之助りやうのすけも遂つひ
 ひ誘まさはれて、ホロリと母ははが綾子あやこを思おもふ心こころを察さつして、涙なみだぐまずには居ゐ
 られ泣なかつた……が。

「何なんです。母様かあはん、確しつりしませんか、ハツハツ、瘦やせた／＼ツて、心配しんぱい

しますが、ありや産後さんごの體からだですもの、そふ直すぐ元もとの様やうに肥ふれやし
 ませんよ。手細工てさいくの人形にんぎやうと違ちがいますからね、ハツハツ。」

「眞實ほんじつですども、妾わたし未だあか嬰あか兒あか生うみませんが、母様かあはんは能よく知しつて居ゐま
 せう。お産さんすりや瘦やせるものだと、誰人たれだつて云いふてますわよ。」

「爾そうけどな。」

「母様かあはん、爾そうさなく思おもつとるとな、體弱からだよはくしてしましますよ。そふ
 すりや綾子あやこが什麼なニに心配しんぱいして體からだはすか知しれませんぜ。母様かあはんが體からだ
 丈夫ぢやうぶにして置おきや、何日いつだつて綾子あやこに逢あはるばかりか、綾子あやこだつて惡わる
 い時ときばかり在ありませんや、好よい話はなしも有ありますからな、ハツハツ。」
 「爾そうですども、それまで妾わたしが綾あやさんとなつて……母様かあはん能よく頼たのみます

よ、ねえ貴郎。」

「爾だく、私等だつて、御隠居さんが氣の弱く成られちやつたら能く働かせんぜ。」

作男の鐵藏が、元氣能く云ふ、それにつれられて、一同も聲あげて、濕つた座敷を浮そふとつとめる。

「眞實に爾だつたよ、もうく綾子の事や、佛様の事は思ひませんでな、皆氣を揃へて働いておくれ、良之助も嫁さんも、妾綾子の事忘れるでな、善う頼みますで、ホ、ホ。」

淋しい笑を頬に表して、浮ぬながらも、暫時は雑談で賑はつた。そして茶を喫ひ口や舌さはりの音が續いて、何時か良之助の母も引

き入れられたか、年老を忘れたやうに笑出すのだ。

三時の茶も済んで、雇男女等はそれく受け持ちの仕業にかゝつたが、母子に嫁の三人は、笑ひ顔を交して、雇男女等を見送り改まつたかのやうに、煙草に時を移す。

「面白い若者達や、未來の苦も知らんで、お米は他人から下れるもんど思てか、暢氣な者ね、羨やましい事ちや、ホッホ。」

煙管を取り上げて、一服喫た母は、斯ふ良之助夫婦に言て、軽く笑ふのだ。母が憂を忘れたかのやうに、笑顔を浮々見せたので、良之助夫婦は、嬉しそふに、顔見合せる。

「眞實ですな、だが母様、今度大阪の方に、東京俳優が来る話が新

聞に在つたから、行つて見ちや何麼です。お清を案内させますから……。」

「ホッ、爾ふですかそりや見ものや、けれども綾子の事考へると、お前等の心配を無にするぢや無いが、行きとも無いで、悪思はんであくれよ。」

「何です綾子さん」と云つて、妾が綾さんに變りますのに……よくせず御出でなさいませな、妾未だ芝居能く見ないのですけど、そりや面白い事だとか……。」

「お前夫婦の親切は、妾忘れやせんけれど、どうも頭が重く成つて……。」

額を押へて、俯首く母を眺めた夫婦は、悲しい思ひやりの苦に横を向いて耐らない涙を浮べて、僅に残つて萎むでゆく朝顔の花を眺める。

秋の家 其二 (息が頬にかゝる)

背戸の竹藪に、烏瓜が熟して、真紅の色を秋の日に照され、燃え出すやうである。

大阪から、銀行重役に其令嬢が、由良要塞の親類の歸りだとして、水上家へ態々立ち寄つたので、急に春が来たかのやうに、緑郎の母が先さだちと成つて、家中は賑かに騒ぎ出したのであつた。

容易に通さぬ。南縁の奥座敷へ重役親娘を案内して、丁寧に優遇し、叱つた事の無い縁郎を叱るやうにして、おはぐろの剃た齒を出して笑ひながら。

「能うお出でなさいました。汚い處で、それに海と山ばかりで、何も見る場所もない、島流し同様な家へ、ホッホ、お美しいお令嬢さんですと、之れ縁郎や、何してるのです。ちやつと御挨拶、否、早ふ御機嫌に出んかい。」

「ハッハッ、否、お構い下ださるな、實はな娘が是非淡路へ行て見たいと、そろもう毎日のやうに催促で、今日は幸い天氣も好し久しぶりで由良の親類を尋ながら、ハッハッ、其歸りぢや失禮ぢや

けど、一寸御寄りしました。」

金口らしい煙草を口にして、大陽な言いぶりであつた。大阪で二の指に折られる。丸吉銀行重役で、天屋五郎衛門と云ふて五十歳に成るのだ。娘は鶴子と云つて十九歳に成つて、今年女學校を卒業したばかりなのだ。

「爾でしたか。恐れ入ります。また先達は大阪のへ御案内下さいましているく、お氣の毒をかけたして、歸つてから家中で喜んで居りましたよ彼の夜でしたか、お嬢さんのお琴で、妾田舎者で分りませんけど、堪能やものどな。」

「ホッホ、あれ、妾下手ですの、彼の劇場大變面白ふ御座いました

わね、之れからちよくく御案内しますわよ、お姑様……否、伯母様行ませうねえ……。」

呆然姑と呼んで、ハツと顔を紅に散した鶴子は、父の顔を仰いで莞爾笑ふのだ。

「ハツハツ、何で私の顔見るのだ。お姑様と呼んだとて、後にお姑様に成るのぢやないか。」

「あれ父様……妾知りません。」

「ホッホ、お嬢はんの妾が姑様に成りや、忝に幸福かしりませんよ早く爾成り度いもので。」

「あれ伯母様まで……おヤッ緑郎さんが、妾貴方忝しなすだかど

待つてましたのよ。」

「否、一寸其のハツハツ、用事が有りましたな、失禮しましたよ、併し、お變りも有りませんで、伯父様、先達は……。」

「オウ、緑郎さんか、娘がな、貴方に……否、此家へ來たいとな、失禮しに寄せて貰いましたよ、お、爾だ、鶴子、緑郎さんに庭なと見せて貰ふて來な……一寸父様用事が有るでな。」

「ハア。」

「緑郎さん、我儘者で、いやもう濟んが、庭見せて下ださらんかな。」

「え、宜しう御座います、さア嬢さん此方へ……。」

耻かしそふに、立ち兼た鶴子も、緑郎の手を出さんばかりにすゝ

めるので、頬を紅に染たまし、縁郎の後に従いて、庭へ行くのであつた。

「ハツハツ、未だ嬰兒でな、否、併しな、御隠居様、先達御相談した通り。見る處二人とも氣も合つたらしいのでな、何日頃と云ふより。年内も來月あたり夫婦にしては何うでせう……娘も待ち兼ねてららしいのでな、ハツハツ、今の娘にや困らせられる……。」
二人の影が、縁から庭へ出るのを見送つて、斯ふ云つた五郎衛門は、甘そふに煙草を吞む、

「爾ですか、そりや妾の方でもな、縁郎が早ふせんかいと云はれますんで、其處には其の……。」

「お噂さを申しては、甚だ失禮ですが、御借債が先代にお在りだつたかどか、そらもう承知して居ますで、え、其娘の爲めに、僅金では御座いますが、一二萬は持たせまつもりでな。」

「否、そそれは別で、ホ、ホ、彼れ二人が仲宜さそうで御座いますね、ハイ、縁郎のやうな者を、左程御思召下ださるのは、何ども有りが度う御座いますしてな、貴方様の方で、御異存さへ無ければ、今日からでも宜しう御座いますよ、ホホ、ホ。」

「ハツハツ、御承知下さいましたか、否、それで娘も喜びませう、何れ戻りました上、吉い日を定めましてな、ハツハツ、子の爲めには、親達も一ど苦勞しますな。」

フウツと煙を吐いて、空壺を火鉢へさし、二人して庭の面を眺めるので在つた。

持參金と、名門の爲め、妻の有る悴をして妻の無いやうに見せ、五郎衛門の娘の惚込んで戀ふのを利用し、水上家へ財産を増そうと云ふ、汚ない慾望を満さそうとするのだ。

豈夫、斯様な野心が、計畫されやうとは知らぬ綾子は、良人から使ひに出され、子供を背負ふたまゝ、隣り村へ行つたのである。

庭の端れの吾妻屋で、◀郎と鶴子の二人は、寄り添んばかりに腰をかけ、秋の町屋根から、遠く山々の霞を眺めて、ホ、と軽く笑を交して居る。

「ねえ鶴子さん、私やもう夫婦に成るのを、怎麼に待ち遠ふしでせう。早く人目晴れたいものですな。」

「あれ、何です、妾かて同じやないの、貴方、妾可愛がつて……くださませうね。」

「何で見捨られるのですか。」

ツウと、頬へ息の蒐る程寄り添つて、互ひに手を堅く握り合ふ途端、垣外へ通りかゝつて、何の氣も無く此様子を眺めて居た。妻の綾子は氣も轉倒するばかりに、慎みぬいた心も忘れ、

「貴郎ツ、何です……。」

愕然振り願つた縁脚は、ハタと△子を睨むで、言葉もなく蒼白な

つた顔に怒りを含み、急すやうに鶴子の手を執つたまゝ、座敷へと
戻る目の前に、熟しきつた柿が、鳥も風も無いのに、ポタリと落る
のであつた

落

葉



(耻かした……)

昨日から今朝にかけての宿り客の爲に、何日になく賑かであつた
が、汽船の都合で早く大阪へ戻つていつた客を見送つてから、再び
元の暗い水上家と成つた。

幾度掃いても、落葉は増るばかりで、掃く者は風より、木を怨め
しそらに仰ぐ、其くせ冬季中は、同じやうに木を恨むでも、落葉

よりは早く若芽の葉が緑り繁く成つて慾しいと、木と空を怨めしそ
らに仰ぐのだ。併し、之れが表示した人生の慾望で、結局までしな
ければ、自分でふ者を、覺る事が出来ない。

『お前の爲めだ、之れには少し理由の有る事で、暫時の辛抱だ。成
るだけ俺の傍へ寄らんやうに、女房だと云ふ様子を見せるな、俺は
ねお前を決して見捨やせん、親類から來て居るやうにして居てくれ
よど夫郎から云はれたのを、不思議とは思つたが、最期の言葉に決
つして見捨やせんと云はれたのを力に、よく聞きたくしもせず、眞
誠に、下女同様に成つて、昨日から働いて居た綾子は、泣く嬰兒を
あやしなから、背にしたまゝ庭を掃て居たのだ。』

茶の間よりから、干高い聲がして、ツウと姿を隠した姑は、睨めつけるやうに、子を呼び寄せ、

「綾子、先刻から呼ぶに、耳が無いかい、阿呆だね、それで縁郎の嫁さんと云はれますか、ちやと此所へ来るがよい。」

「ハイ、爾でしたか嬰兒が泣きますので、どうも済ませんでした。」

何ぞ御用でも出来ましたか。」

「何ですつて阿呆のやうな顔して、用が有つたから呼んだんですよ、一寸座敷へ来ておくれ。」

「ハイ、唯今……。」

背の嬰兒を下して、乳房を含ませながら、襟の間から真白い肌を

のぞかせ、呼ばれた座敷へ無心顔してゆく、

「ハイ、何ぞ御用でも……。」

「お前な、今迄何も云やしなかつたが、昨日大阪のお客様が在つた時、縁郎に恥かかせたやそうな、眞實ですか、縁郎は怒つてな、今も口聞きませんぞ。」

「えッ、縁郎のへ、講が恥を……知りませんが、お使ひから戻つて参りますと、臺所の三疊へお呼びなつて、親類の者のつもりで居てくれとお話が有りましたから、其つもりで居りましたのが、何ぞお氣に障りましたかしら。爾でしたら怎麼にしてもお詫しますか……。」

「爾れだつたよ、お前が使の戻りだつた、垣の外で大きな聲あげたとかで、お客様の前縁郎が恥かいたのぢやないか。」

「あッ、彼の時ですか、ハイ遂ひ女のたしなみを忘れまして、怎も濟ません事しました。」

「濟ん事有りやせんが、縁郎に恥かゝせんかて宜いぢやないか、何ぞ怨みでもあつてだらうが、否、爾ですく、縁郎や、縁郎ッ……。」

「へえッ。」

隣りの室から、蒼白い顔を出し、凝眼乎綾子の顔を見て、卑しむやうな鼻で笑ひ、

「何ぞ用……。」

「用かでは有りません、昨日お前に恥かゝしたとか……彼りや嘘だつたのかい。」

氣の無い縁郎を眺めて、火をたきつけるやうに、憎らしいと云ふ様子をする。

「ハッハッ、彼れですか、眞實ですとも、私が鶴子さんと、仲宜く話して居ますと。ウワツ貴郎ちうて、大きな聲出して、泣き出したのでな、私恥かつしかつたんです。」

「爾だろく、母様かて、それ聞いて恥かしい事ぢや、怎麼です。綾子、お前それでも恥と思はんかいな。」

「ハイ、済ませんです。許しておくんないまし、至らないので、遂ひふしだら見せました。勘忍してくださいませ、以後注意するから……。」

半ば、泣きぢやくるやうに、哀みを乞ひながら、詫び入る綾子を冷やかに眺め、

「ホッ、又泣き出したのかい、ようそふ涙が有りますね、餘り意汚なく物食べるから、それで皆涙に成るのだらう、これから少し食物慎しむがえいぜ。」

「眞實に爾だ、お米や副食物が費るく思つたら、お前が意地汚く食べるのだつたかい、ちどころへておくれ、米や何かはひとりで

に出るもんぢや無いよ。」

「えッ、あの妾が……済ません、注意ますで、悪ふ御座いました。」

嬰兒が乳足りませんので……否、勘忍して下さいませ、悪ふ御座いました。」

「うひ、注意るくくるつて云ふから、今日は勘忍して遣るが、俺の云ふ事、何でも聞くのだぜ、必だよ、聞かなかつたら……斯ふして遣るぞ……。」

呑みかけて茶碗の茶を、さぶりと絞すへ浴びせて、母を見かへり高く笑つて立ち上る。それに従いて、母も綾子を後目に笑つて、木の葉飛び来る、縁側へ出るのだ。

落葉 其二 (何に無くも芳爾)

洗流場の水が、今朝凍たとか云つて、薄く刃物のやうな、硝子か
けかとも見る破片を、杓子にくみ捨てられて、折からの日に、解た
のであつた。

嬰兒を背に負つて、お襦袢やら、汚れた物を洗つて居た綾子は、
大家の娘で居た時分の白魚のやうな眞白い手で無く、荒れた指が霜
やけのやうに、皮膚が切れて居る。

「若し、若奥様、妾が洗ひませう、まアお出しなさいませ、何です
御遠慮が有るものですか、妾は雇下女で御座いますよ、あれ、お

出しなされ。」

下女の花が、餘りのいたはしさに、見兼て後家隠居の眼を忍び、
斯ふやつちや手傳ひに来るのだ。

「おや、誰人かと思つたら花でしたか、何日も有りがたいことです
が、又姑様に見られると妾は構はんが、お前がつらいからね、も
う直さ了ふから、まア置ておくれ。」

「へえ、けれど……。」

「まア置ておくれ、お前の親切は忘れませんよ、あれお姑様が叫ん
でるぢやないか、早ふ行つて出いでな。」

「へえ。」

行きかねた足を、濫々離れの方の座敷へ行つたが、直ぐ駈けるやうに戻つて来て、

「若様え、彼の鬼婆……否。御隠居様が、呼んで居りますよ。」
ハツと赤く成つた顔を、恥かしそふに綾子に對て、姑の呼びでる事を云ふ。

「アレ、爾から。」

と云いながら、手早く洗物をかたづけやうとするのを、下女の花は手傳つて、

「あれ若奥様、後は妾がしますから、さア直とも出でなされ、又……ですから。」

「爾だつたね、ぢや頼みますよ。」

駈けるやうに、呼ぶ姑の座敷へ、手を拭きく恐く行く、綾子の姿を見た姑は、何日に無く莞爾く笑ながら迎へて、

「あゝ、綾子だつたかい、よう早ふ来てくれました。實はね、餘りお前が働くので、世間から慘酷やうに思はれちや成らんよつてな少し休むだらと、ホ、ホ、呼んだのさ、今茶湯入れるでな、さゝ背の嬰兒下したらどうかい、疲勞たろうに……。」

嫁入つて、久しぶりで聞く姑が優しい言葉に、何か……とは察したが、苦勞なれぬ綾子には、其奥深くまでは知らなかつた。

「あれ姑様、茶湯なら妾がしますに、否、疲勞やしません、ども濟

「ません……。」

「何んだね、嬰兒が出来てから、えらく働くやうに成つたね、體も丈夫に成りますよ。これ綾郎や、茶湯が入いつたで、早ふ来てはどうかへ。」

「ホウ、爾ふですか。」

書齋と定た。隣室から出て來た縁郎は、綾子を見るより、嫁入當時のやうな笑顔を見せて、抱かへる嬰兒をあやしなから。

「ホウ、笑つて居るぜ、あゝよい子ぢや、綾子お前疲勞たらうね、けど能う働いてくれるから、母様喜んで居ますぜ。」

「へえ、否、能くも働きませんが、嬰兒が傍からく汚し物だすの

で、働かねばなりませんやうに成るので、ホ、ホ、ホ。」

「爾だろ、けど穢すなど叱つたどて、まだ何にも知らんからな、ハツハツ。」

「妾もな、綾子が來てから、ぢりきに體も樂に成つたで、禮せにや成らんと、斯う思つとるがな、あれ眞實だよ。」

「何です、那樣水臭い事、妾こそ至りませんので日夜すまんくと思つて居りますのよ。」

暫時は、母子嫁三人が、水入らずのやうに、笑ひ私語いて、茶を呑ひんで居た。

「あゝ忘れて居た。あのな、お前が能く働いてくれるばかりか、妾

を能く面倒見てくれるのでね、其禮しよと思とるが、これと云ふ事も出来ないが、什麼だろ、お前の顔の色も餘り善う無いから、少し實家へ行つて居たら……縁郎そふぢやないか。」

「へえ、爾ですとも、綾子、ちと實家へ行でたら良いぜ、私も行けたら後から行くからね。」

「ハ、ハイ、あの妾が實家へ……。」

「お前わ、何とも思てや居やせんだらうが、餘り體が丈夫そふぢや無いで、憂々餘計な事考へるから、めつきり體が瘦たよ、それも何ですよ、つまらん自家の事考へるからで、嬰兒の爲めに成らんぞな。」

「ハ、ハイ、けど妾何も弱い所有りませんわ、實家へ行かないからつて、若し病ッたら少し休まして貰ひましたら良いのですもの。」
「え、ッ、阿呆だな、母や私が、親切に云ふて遣るのに……えッ、先達何と云つた。注意て、私の云ふ事聞くから、勘忍してと云ふたぢやないか、聞かんと承知出来んど、行けつたら、考んで行かんかへ、阿呆……。」

「眞實に爾だよ、妾が親切を無駄にする事が有るものか、親不孝を知つてかい。」

「へえ、否、と兎んでも無い、ハイ、参ります、行つて参ります。ホロ／＼と涙を溢して、姑や夫郎の思惑あつた事を痛切に味はつ

た。

茶の間を出て、自分の室へ戻つた綾子は、溢れ出る胸の苦の、搔きもしり度い心地がした。

其處へ、女中のお竹が、實家からの手紙を差し出したので、胸どいろかせながら、封切つて見る眼には、字の讀めぬ程涙で曇つて、我切と伏して泣き鳴咽ぶ。

綾子の行衛 其一 (死の恐怖よりは)

玄海灘の潮流が、馬間海峡より入て蒼龍の如く内海より。大平洋よりは髪を逆だて、駁進する猛虎の如に寄する激浪が、岩礁にあた

つて叱つたするを迎えて、一度に撃つて出で、相持し甚闘し、怒號叫喚相驅逐して、瀑布の逆天するかのやうに、龍虎相擊倒れる其激し合ふ浪が、大小數十の盤渦を作つて、呀然として相呑吐し、追ては合ひ、離れては合ふ其間を、たくみに船をあやつてゆく帆が、蝶の戯むれるかのやうに、其景極まり無き鳴門海峡は、永久に變ら無く、それを續けて居る。

水上家を、追れるやうに、實家への口實で出された。彼の綾子は再び見られぬと覺悟したか、戀しい縁郎の家を、見返りがちに、車に揺れて出たのであつた。

實家よりの手紙に、慕はしい母が、初霜の朝から、急に病氣に成

つて、神戸の病院へ入院したのと報知で胸がつぶれやせぬかどまで身の上の不幸をかこつた。

死んでも水上家からは、離別はされぬとまで思つたが、居られぬ身の上の悲しきには居られ無い、と云つて、良人の言葉に反きも成らず、悄然と水上家を出たが、唯だ體が弱いでは、兄良之助の家にも行たか無い、

優しい兄では有るが、若し……そんな大なる問題が起つたと云つて如何に自分が善ども、義理ある媛の前へ對して、此身が樂々と居られやう。常識も良心も無い癡痺した女なり知らぬ事、女としては至らぬながらも、充分に責任は良人に盡したつもりだ。

千種の思ひに苦しむだ綾子は、實家への車を、大阪行き汽船會社へ廻り行かしたのであつた。そして恐怖い者に襲はれるやうな心を抱いて、慌しく人目を忍ぶやうに、船客と成つた。

戀しい、懐かしい、彼の故郷の淡路を後に、夜の浪に乗つたまゝ、燈臺のさす燈火で、彼處邊りが良人の家、此方が實家の兄の家と、甲板から望むで涙に見えぬ夜の空を仰ぐのであつた。

神戸の病院へ、母の病氣を訪ふ可く、始めは志ざした綾子は、什麼して病床の氣弱い母に、此胸の苦が語られやう、煩悶れば悲しむ程、生きて居る身を歎くのだ。

大阪の伯父が許を訪ふて、總ての悲苦を語つたなら、又良人として

思ひ返して、元のやうに愛も出るだらう……と、思ひ返しはしたものの、儚無い身の上を、什麼したものとて、女心の悲しさ、語る人として無い、眞實の獨りぼつちと成つたのだ。
過去を追想て、楽しかつたを浮べても、それが永く積か無い、直ぐ歎息と成るのだ。

「噫々……。」

深く歎息を吐いて、呆となつたやうに、星きらめく空を仰いで、ポロ／＼と涙の苦に泣くのだ。

幸か不幸か、聞く人としてない夜の船の甲板上で、さめ／＼と悲痛に悶泣いたが、慰める者として無い、スヤ／＼と寝る我兒の顔に、無

心の笑が浮んで居る。

「お、坊や……。」

此言葉よりなかつた。ハラ／＼と頬を傳はつて落ちた涙は、甲板に深い思ひを印した。

歸るとて家なき同様、頼る實家ありとも、此儘居られる身で無し病院の母に語れば病重うせるばかりで、もう身を殺すより他が無い程、思ひあまつた。

怨めしいとは思つたが、假にも姑と成つた良人の母親、夢が失たかど、疑ひ恨だが戀しの良人、優しい思やりの深い兄様、嗚ぞ逢ひ度う思ひなさらう慕はしい母、それが後頼む嫂め……。

「噫々、會い度い、今一度逢い度い……。」

身を煩悶て斯う云つた綾子は、涙も枯れ盡て、血を絞るやうに泣く。

「否、もう泣きませぬ、泣いたとて、何んの功がありますものか
おゝ死……。」

前後を見廻して、身を戦慄した綾子は、死の恐怖よりは、生の恐怖が甚しかった。

嬰児を置いて……と思つて、母の苦も知らずスヤ／＼寝て居るのを見ると、脹り裂く胸の悲歎が、秘／＼と襲ふ。

「嬰児を置いて死くのは良いが、知らぬ繼母に……噫々……可哀想で

もう什麼しやう……。」

繼母と思つた瞬間、姑の苦を深く胸に傷つけられた綾子は、嬰児を置いて死なれ無い、

「いッそ……。」

耐らない苦悲が、抱き締める嬰児の心に通じたか、オギャ／＼と泣き出した。

「おゝ坊や……な、な、泣いて下ださるな、坊は良い子ですもの……

……よし／＼、此母様は……鬼に成つたのよ、勘忍してよ、あ……
……もう……。」

聲出さじと、唇を噛みしめれば、それを洩て思はず嗚咽び泣く音

が、口を衝て出る。

『あゝ、もう思ひまい、神戸の母様……兄様も、夫郎も、夫郎の姑様も、皆さん御壯健でね、く、暮して下さい、坊や勘忍してね、さようなら……。』

ワツと叫びで、泣き嗚咽ひだ聲が、推進機の音に消されて、四邊りの静寂は多少破ぶつたが、身を躍らせた綾子の姿は、浪の驚愕する音の中へ、ざぶりと飛び込んだまゝ、潮を散らして、影の消え没し去つたて、唯だ甲板へ残されたる。涙の點々として泣き倒れた唇の跡が冷たく濡れて居る。

渦を巻いてスツツと神秘の私語する浪の上を、千鳥がもの悲しげ

に、鳴つて淡路あたりへ飛ぶ。

綾子の行衛 其二

(唯千鳥の悲しき)

寒げた松林が、舞子の濱から須磨へかけて一帯、真白の如な砂が其色彩を添へて、秋去く空に、集鳥が群れひ飛ぶ。

彼處此家の漁村から、けたましい叫び聲たて、役場の者を取り巻きながら漁夫等が、須磨の濱へ駆けてゆく、

其翌日の新聞紙は、筆を揃へて、母子の投身を告げた。

遺書は、僅に……人の親の心は闇にあらねも、子を思ふ故に……讀む者をして、面を覆しめた。

死者の母子が身許が分つたか、四五日續載されて、新聞紙上で姑の無情と、慾望の良人が筆誅されて在つた。

後の綾子が周圍は、唯だ浪に悲しと飛び交ふ千鳥のみ知つて、チヨと鳴き冬寒く來る夏を悲しむでか、思ひ出深い舞子から、淡路へ駆けて須磨の空底く過ぎる。——完——

艶麗筆を以て聞へる。女流作家の某子が、戀と女との題名で、變裝探見せし女様々の職業を執筆展開せんと、苦心の作は、出版の上で…… (小僧より)

大慈悲須磨の仇浪 (終)

著作
所有

正 價 五 十 錢

大正五年三月二十日印刷

大正五年三月廿一日發行

編者 竹柴如泉

發行者 山崎曉三郎

印刷者 岡部碩之

東京市淺草區瓦町二十八番地

發賣所 活動之俱樂部社

大 悲 慘 劇
須 磨 的 仇 浪 附 奧

□ 帝國主任
占 染井三郎氏
本 柴如泉氏
部 竹柴如泉氏
長

合著（口繪實寫フィルム挿入）

(新刊)

終編名金
世界的
大冒險
ロロの復活

定價金三拾錢
郵税金四錢

世界の活動寫真界を震愕しめたる名金の終篇として、夢裡霧中に迷はせたる。ロロが、南洋狐島に突如復活して、大活躍を演じたるを、素早くも如泉氏の筆に執れて、期待されつゝある讀者の前へに現はれた。幸ひに著者が意を諒せられて多大の好評を乞ふ

218
990

終

